

前田遺跡

山梨県北巨摩郡小淵沢町下笹尾地区県営圃場整備事業に伴う

前田遺跡発掘調査報告書

1985

小淵沢町教育委員会

序 文

小淵沢町は、そのほぼ全域が八ヶ岳連峰より続く南西傾斜の台地上に位置し、古来より気候、風土に恵まれ、いまなお、随所に豊かな緑が見られます。

このような環境に恵まれた我町は、古くから人々が生活を営んでおり、祖先の文化遺産である埋蔵文化財の宝庫であります。

この度、県宮闈場整備事業にともなって、下笠尾字前田の遺跡発掘調査を行いました。

その結果多数の住居跡の発見があり、縄文時代と平安時代の遺跡であることがわかりました。この成果は小淵沢町の古代を解明する上で手がかりとなる重要な遺跡であることがあきらかになり、このたび、これらの成果をまとめた報告書を刊行するはこびになりました。

本報告書が我々の祖先の歴史を解明するうえで貴重な資料となることを念願するとともに、埋蔵文化財に対する理解が一段と深められることを願ってやみません。

最後に、調査整理にあたって多大な御協力を賜った、県文化課、県北土地改良事務所、小淵沢町土地改良区をはじめとする関係各位に深く感謝の意を表します。

小淵沢町教育委員会

教育長 宮 沢 辰 雄

例　　言

1. 本書は山梨県北巨摩郡小瀬沢町下笛尾地区県宮園場整備事業に伴う発掘調査である。
2. 本調査は、峠北土地改良事務所の委託を受けて、小瀬沢町教育委員会が実施した。
3. 本書の執筆、遺物の実測、トレイス、図版作成、遺物の写真撮影は佐野勝広が行なった。
4. 出土遺物は、小瀬沢町郷土資料館に展示保管し、図面類は、小瀬沢町教育委員会に保管している。
5. 遺構番号は、昭和57年度の発掘調査使用の続き番号とする。
6. 発掘調査及び報告書刊行に際しては、以下の方々に御指導、御助言をいただいた。御芳名を記して厚く御礼申し上げる。(順不同)
木木健氏(県文化課)、坂本美夫氏(県埋文センター)、新津健氏(県埋文センター)、米田明訓氏(県埋文センター)、保坂康夫氏(県埋文センター)、山路恭之助氏(須玉町教育委員会)、平野修氏(白州町教育委員会)、櫛原功一氏(大泉村教育委員会)、深沢裕三氏、峠北土地改良事務所、小瀬沢町土地改良区

7. 調　　査　　組　　織

1. 調査主体 小瀬沢町教育委員会

2. 事務局

教育長 宮沢辰雄

教育課長 田中吉彦

教育課係長 小林和幸

3. 調査担当

佐野勝広

4. 調査参加者(順不同)

三井貴、平田牧子、三井ちかよ、内出つゆ子、伊藤とめ子、伊藤きよ子、坂井ふじ、坂井けさ子、坂本はる代、内田とくえ、久保田鈴子、草野光夫

目 次

序 文

例 言

I 調査に至る経緯と経過	4
II 地理的・考古学的環境	9
III 遺 構	15
IV ま と め	55
おわりに	60

挿 図 目 次

第1図 遺跡付近の地形図	5
第2図 遺跡配置図・グリッド図	7～8
第3図 遺跡位置と小源沢町の遺跡	11～12
第4図 第2号住居址とカマド	26
第5図 第5号住居址とカマド	27
第6図 第6号住居址とカマド	28
第7図 第7号住居址とカマド	29
第8図 第8号・9号住居址とカマド	30
第9図 第10号・11号・12号住居址と10号住居、11号住居カマド	31
第10図 第2号住居址出土遺物(1)	32
第11図 第2号住居址出土遺物(2)	33
第12図 第2号住居址出土遺物(3)	34
第13図 第5号住居址出土遺物	35
第14図 第6号住居址出土遺物(1)	36
第15図 第6号住居址出土遺物(2)	37
第16図 第7号・8号・9号・10号・11号住居址出土遺物	38
第17図 第9号住居址出土遺物	39
第18図 第11号住居址出土遺物	40
第19図 第11号、12号住居址、第1号土師器窯址出土遺物	41
第20図 第1号掘立柱建物址	47
第21図 第2号・3号掘立柱建物址	48
第22図 第4号・5号掘立柱建物址	49
第23図 第1号・2号土師器窯址、第1号・2号集石造構、第12号土壙	50
第24図 第3・4号・5号・6号・7号・8号・9号・10号・11号土壙	51
第25図 第6号・7号・8号上塙出土遺物、造構外出土遺物	52
第26図 第9号・10号土壙出土遺物	53
第27図 第11号・12号土壙、第1号集石造構出土遺物	54
第28図 前田遺跡縄年図	58～59

I. 調査に至る経緯と経過

小淵沢町下笛尾字前田の周辺は、昭和55年度から県営圃場整備事業が開始されており、笛尾畠址から南東に延びる細長い水田地帯が、大規模につくり変えられている。この水田地帯の東側に向かって、半島状に突き出た丘陵があり、昭和53年の分布調査により発見された前田遺跡はこの丘陵上にある。縄文時代と平安時代の遺跡として知られている。昭和55年、前田遺跡の南側が圃場整備の工事に入った時、そこに至る農道が拡張され、その断面から竪穴住居址が存在することが確かめられた。次いで、昭和57年、圃場整備事業に伴なっておこなわれる農道拡張工事が前田遺跡の一部にかかることになったため、小淵沢町教育委員会は、峠北土地改良事務所、小淵沢町土地改良区、県文化課と協議の結果、拡張部約400m²の発掘調査を実施することになった。発掘調査は、峠北土地改良事務所の委託を受けて小淵沢町教育委員会が、昭和57年10月25日より同年11月25日までの30日間おこなった。その結果、平安時代の竪穴住居址4軒と、掘立柱建物址1軒、縄文時代中期の土壙2基を検出した。その成果は刊行済みである。

その後、昭和60年度の県営圃場整備事業が、前田遺跡の存在する丘陵全体におよぶことになったため、峠北土地改良事務所、小淵沢町土地改良区、県文化課、小淵沢町教育委員会の四者協議の結果、発掘調査を実施することになった。発掘調査は、事業主体者である峠北土地改良事務所との負担協定により、文化庁、県より補助金を受け、峠北土地改良事務所の委託によって、小淵沢町教育委員会が発掘調査主体者となり、記録保存を目的として、昭和59年10月1日より同年12月31日まで発掘調査が実施された。調査の結果、平安時代後半の集落址で、平安時代後半の竪穴住居址9軒、掘立柱建物址5軒、土師器窯址2基、集石土壙2基、土壙10基を検出した。

発掘調査方法

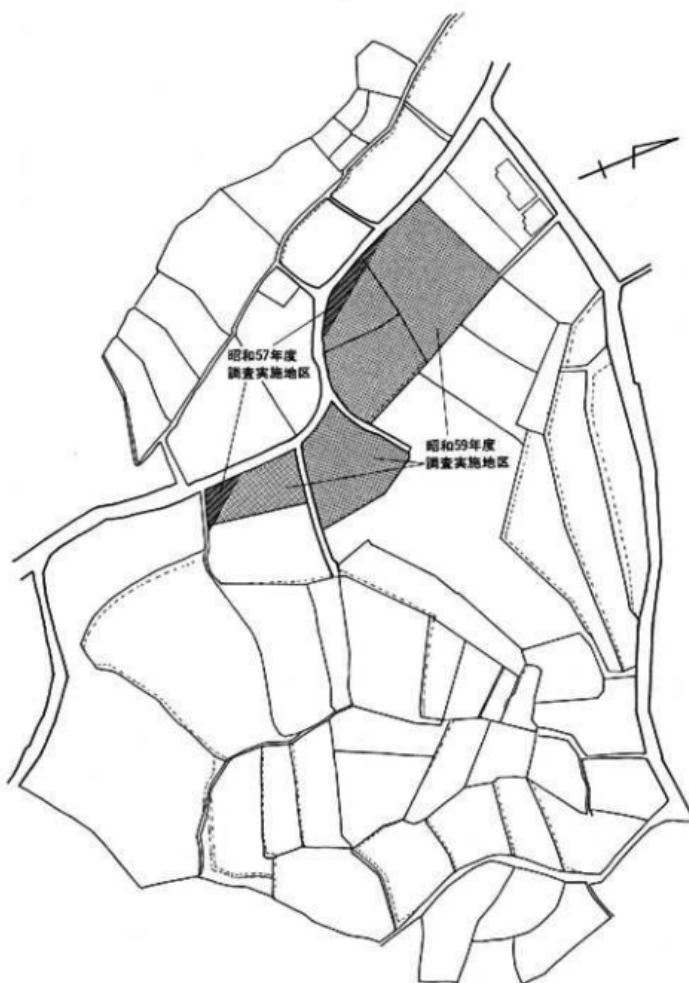
調査区全体を東西南北にあわせて10m方眼のグリッドを設定、北から南へA～I列とし、西から東へ1～9列として、例えば、A-1と呼称した。表土層は遺構面までの深さを確認した後、大型重機による排土を行ない、その後全域を遺構確認面まで人力によって掘り下げた。

層序

本遺跡は、南に緩傾斜する丘陵に立地するが、上層の堆積状態は、それほどの差ではなく、後世の擾乱を除いて、比較的単純な層序を呈している。小淵沢町の土壙は八ヶ岳火山灰であり、下笛尾地区もその例外ではない。本遺跡の層序は、地目が、畑地と水田であったため2種類の層序を呈していた。

畑地

第1層 表土層 農作土層 黒褐色を呈する。堆積の厚さは13～17センチである。



第1図 遺跡付近の地形図

第2層 黄褐色土層 ソフトロームで堆積の厚さは15~36センチである。

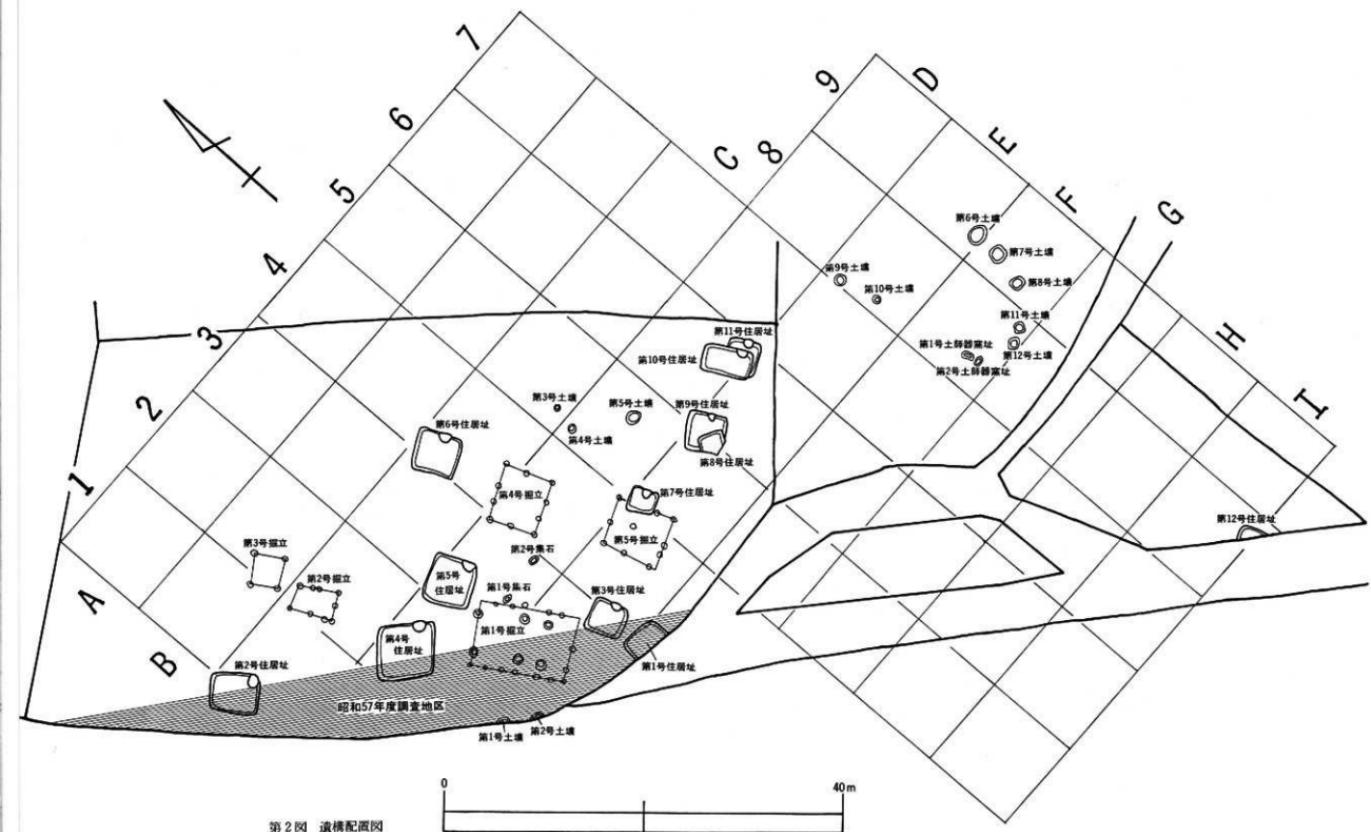
第3層 黄褐色土層 ハードロームである。

水田

第1層 表土層、耕作土層 黒色（いわゆる黒ボク）を呈し、堆積の厚さは10~20センチである。

第2層 鉄分集積土層 水田の床上で堆積の厚さは、6~10センチである。

第3層 黄褐色土層 ハードロームである。



II. 地理的・考古学的環境

小淵沢町は、山梨県の北西部に位置し、北巨摩郡に属している。当町は八ヶ岳連峰の樅現岳を頂点とする南西傾斜の広大な台地上に占地し、北から南に延びるくさび形を呈している。総面積 3426 km² の町である。北は樅現岳の山頂を境に、長野県訪志郡富士見町、南は笛無川を経て白州町、東は、女取川を境として長坂町にそれぞれ隣接している。

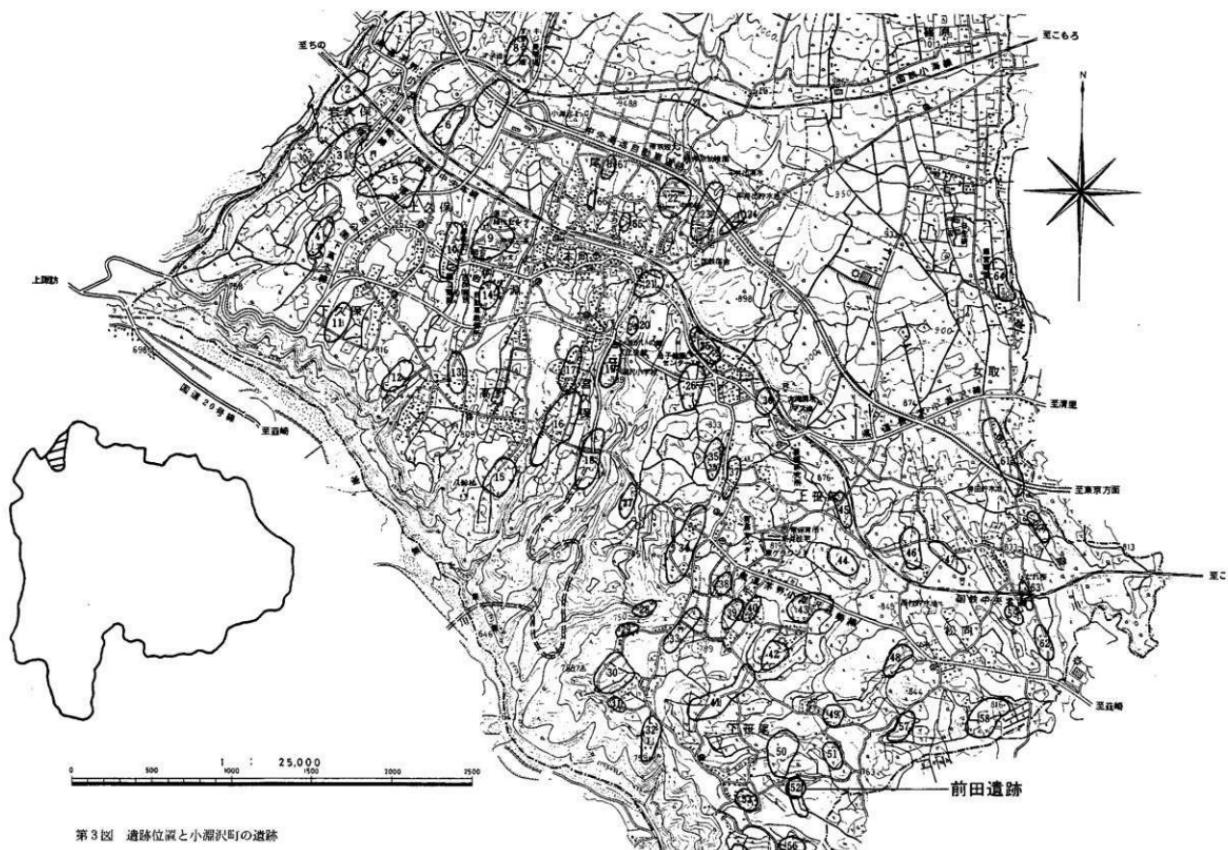
八ヶ岳は最高峰が赤岳 (2899 メートル) で、日本列島を地質学上東西に二分する糸魚川一静岡構造線の東縁にフォッサマグナに沿って、噴出した南北 250 キロメートル、海拔 2000 メートルを越える一連のみごとな火山列を形成する。その山頂部は、著しい浸食作用により、荒々しくけずられている。さらに八ヶ岳南麓の小淵沢町をはじめ火山碎屑物の裾野は広大なスロープをつくる。このスロープの北部海拔 1100 メートル以上は、林野を形成し、海拔 620 メートルから 1100 メートルの地帯は緩かな斜面が続き、八ヶ岳南麓から流れでている甲六川、女取川の湧水を利用し、耕地が、拓け、その間に集落が点在している。このような地勢のなかにあって、前田遺跡は、小淵沢町下笛尾字前田を中心に所在し、国界橋付近より笛無川ぞいに韮崎市にいたる左岸には、八ヶ岳の山体崩壊期の韮崎泥流の活動により形成された、高さ 70 ~ 80 メートル、延長 28 キロメートルにおよぶ、通称「七里岩」と呼ばれている急崖の内奥部で南に向かって三角に突き出た半島状の丘陵に位置する。標高は約 770 メートルを測る。調査前の地図は畠地と水田であった。

小淵沢町域の遺跡は、昭和 53 年におこなわれた分布調査の結果、67ヶ所の遺跡が確認された。これらの遺跡を時代別に整理すると、先土器時代の遺跡は、調査例ではなく、町内での遺跡の在り方自体不明な点が多い。表面採集で、松向字杉の木平より、縦長刺片、上符尾字夏秋より、細石核が発見されている。小淵沢町域内ではまだ未知な部分が多く今後の調査に期待される。

縄文時代は、最も遺跡の数が増加する時期であり、小淵沢町の分布調査の結果においても、発見数 67ヶ所中、縄文時代の遺跡数は 60ヶ所発見されている。特に縄文時代中期は八ヶ岳南麓で最も遺跡数が増えた時期で、八ヶ岳南麓一帯が「縄文文化の宝庫」と言われるゆえんである。縄文時代の早期及び前期後半の遺跡は少なく、発見されていないが、隣接町村で、この時期の遺跡が発見されていることから今後当町でも発見される可能性はある。縄文時代前期後半の時期の諸磯式、十二善提式の土器は各地で発見され、岩久保字岩窪、上久保字上井詰、下久保字加室、高野字殿平、宮久保字上八野田、他数遺跡で発見されている。縄文時代中期では定着型の集落が出はじめる。上久保字中原からは、酒釀道具に使用されたといわれる有孔鈎付土器が農作中に掘り出されている。又中原遺跡は、昭和 47 年に中央道建設に先立って緊急調査が実施され、10軒の縄文時代中期の住居址が発見された。その大部分は曾利式期（縄文時代中期後半）である。縄文時代後期は、中期に比べて、遺跡数の少なくなる時期である。後期の遺跡としては、宮久保の上平井出遺跡があり、中央道建設に伴う発掘調査で後期の敷石住居址が 1 軒発見

されている。縄文時代晚期は、上笠尾字雪車、上笠尾字源氏籠、上笠尾字狐尾の遺跡で晚期終末の土器が出土している。弥生時代の遺跡は、雪車遺跡、茶屋久保遺跡、夏秋遺跡、源氏籠遺跡、田頭遺跡、長尾根遺跡、狐尾遺跡、江戸山遺跡、向原遺跡、頭佐沢南遺跡、篠八田遺跡の他数遺跡が発見されている。中でも弥生時代中期初頭の遺跡が多く、この後の弥生時代後期の遺跡数は、少くない。続く古墳時代は、高塚古墳の時代である。町内において、明瞭な古墳時代の遺跡は発見されていない。しかし、少量ではあるが、4世紀中頃の遺物が、松向の宝ヶ森遺跡で発見されている。調査によっては、今後、新たに発見される可能性は高いであろう。歴史時代の奈良平安になる遺跡の数は増してくるが、小瀬沢町内では、奈良時代の遺跡は確認されていない。平安時代集落の存在したことは上平出遺跡や中原遺跡、前田遺跡で確認されているが、分布調査においても、26ヶ所の存在が知られる。平安時代の八ヶ岳山麓は牧場や莊園関係で人々が山野に入り込み、盛んに開墾した時代で、集落数も急増する。水田耕作のできそうな湿地帯に面した丘陵上に立地することが多いことから、定住的な生活が想像できる。

中世以降の遺跡としては、下笠尾に地元では城山と呼ばれている「笠尾堀跡」があり、七里岩上の要地に位置し、土壘の形跡を残している。又本堀跡の南には、数十人を入れる洞穴があり、この穴で警鐘を打ち鳴らしたと伝えられている。なお、本堀跡周辺の地名、小字の中には、北に「馬場」、「馬場の井戸」、北東に「御所屋敷」、「上屋敷」、東に「上屋敷」、「東屋敷」、「中屋敷」、「御藏屋敷」、「堀の内」などが見られ、この堀跡の歴史的な姿を残していると思われる。



第3図 遺跡位置と小淵沢町の遺跡

小淵沢町の遺跡

No.	遺跡名	所 在 地	地 月	地形、標高	遺 物	備 考
1	上前後沢	岩久保上前後沢	畠、桑	尾根 940	縄文中期(新浜、竹利)、平安	
2	下前後沢	岩久保下前後沢	畠、桑、山林	" 860	縄文中期(五箇ヶ原)、平安	
3	岩 窓	岩久保、岩床、 窓前	畠、桑、宅地	" 850	縄文期(猪俣B、十三番櫛) 中(五箇ヶ台、藤内、曾利)	①信濃14の3 S37. 武藤孟 ②大阪市立博物館、町教育委員会 ③岩窓前 S38. S47.
4	上 宮 原	岩久保、下原、 上久保、上宮原	畠、桑、山林	" 820	縄文中期(五箇ヶ台、曾利)	④F原遺跡 S38. S47.
5	竹 原	上久保竹原、宗尚、桑		" 870	縄文中期(紀、曾利)平安	⑤水高B遺跡 S47.
6	宗 尚	上久保宗尚	畠、桑、山林	" 850	縄文中期(紀)後(場の内)	⑥宗尚A遺跡 S47.
7	中 原	上久保中原	畠、牧草、桑	" 930	縄文中期(五箇ヶ台、新道、藤内、 井戸尻、曾利)後(場の内) 平安	⑦山梨県中央道遺跡調査 報告書 S49. ⑧山梨県 教育委員会、井戸尻考古 古館
8	上 井 譜	上久保上井詔	山林、畠	" 940	縄文期(猪俣C)中(井戸尻、 曾利)後期	⑨進藤亮一 S38.
9	湖 平	延樹選平	宅地、畠	" 850	縄文中期(井戸尻、曾利)	S38.
10	天 神 宮	上久保、天神宮	宅地、畠	" 840	縄文中期(五箇ヶ台、新道、藤内、 井戸尻、曾利)後(場の内)	⑩小林洞口(八ヶ岳山莊) 井戸尻、曾利)後(場の内) ⑪東屋 S47.
11	下 久 保	下久保石上9	畠	" 820	平安	
12	加 座	下久保加座	畠、桑	" 810	縄文期(十三番櫛)中(五箇ヶ 台、井戸尻)	
13	高 施	高野舟久保	桑、宅地	" 820	縄文期(中(井戸尻、曾利)後	S38.
14	殿 平	高野殿平	宅地、畠	" 850	縄文中期(井戸尻、曾利)	S38. S47.
15	前 通	高野前通	畠、桑	" 790	縄文前期(猪俣C)中、平安	
16	トス里田 (富久保)	富久保上八里田	畠、桑	" 820	縄文前期(猪俣)中(藤内、曾利)	
17	西 篠 敷	富久保西篠敷、桑 の前	宅地、桑	" 830	縄文中期(井戸尻)	
18	深 泉	富久保下深沢、上 深沢	山林	" 820	縄文前期(猪俣A)中期(曾利)	
19	上深沢 A	富久保上深沢	宅地	" 830	縄文中期(曾利)	⑫町教育委員会
20	上深沢 B	" 上深沢	墓地	" 850	一字一石碑20:	⑬名取保
21	原 東 沢	" 原東沢	宅地、畠	" 870	縄文中期、晚(後半)	⑭大正堂
22	小瀬沢学校	" 古吉屋	学校	" 910	縄文中期(井戸尻、曾利)後 (称名寺、場の内、井戸尻、曾利)後(称名寺、場 の内、加曾利B)平安	⑮小瀬沢中学校 ⑯下瀬井出 ⑰山梨県中 央道報告書 S49.
23	上 平 井 出	富久保上平井出	道路、宅地、 畠	" 910	縄文中期(五箇ヶ台、藤内、井 戸尻、曾利)後(称名寺、場 の内、加曾利B)平安	⑲県教育委員会
24	上 平 井 出	富久保上平井出	道路、桑	" 900	縄文中期(曾利)	
25	茶 茶 久 保	上藤尾、茶茶久保	桑、宅地	" 870	縄文前期(十三番櫛)桑生中	
26	夏 秋	上後畠、夏秋	桑、畠	" 850	縄文前期(猪俣C)中(五箇ヶ台、 曾利)桑生中(先土器)	
27	中 深 泽	上後坪、中深沢	桑、畠、山林	" 800	縄文中期(五箇ヶ台)	
28	加 介 B	下後尾加介	畠	" 800	縄文前期(十三番櫛)中(五箇ヶ 台)	S47. ⑲天狗岩
29	加 介 A	下後尾加介	畠、山林	" 790	縄文中期(五箇ヶ台)	
30	H I 頭	下巣山田頭、 天狗岩	畠、桑	" 790	縄文前期(猪俣C)中(井戸尻、 曾利)桑生中	
31	路 久 保	上御足野地久保	桑	台地 770	縄文中期(五箇ヶ台)	
32	後 尾 尾 跡	下後尾継地久保	桑、山林	" 750	縄文前期(猪俣)中世	⑳若狭型漆(河内)
33	雪 事	上巣山雪車、下雪 尾宮の前	畠、宅地	" 790	縄文中期(曾利)桑生中	
34	源 氏 施	上善源源氏施	畠、水田	" 800	縄文早、前(猪俣A、B)中(五 箇ヶ台、新道、藤内、井戸尻、曾 利)後(場の内)桑(先)桑生中	㉑今井兵衛

A6	遺跡名	所在地	地目	地形、標高	遺物	備考
35	長 尾 横	上善尾長尾横	畑、水田	尾根 820	鏡文前(謹職C)中(五領・台、曾利)弥生中、平安	
36	海 の 前	上善尾海の前	水田、畑	斜面 870	鏡文前(謹職B)中(井戸尻、曾利)後(塚の内)	S 38.
37	中 桟	上善尾中林2166	宅地、桑、畠	尾根 820	鏡文中、平安	
38	御 端	上善尾御端	畑、桑	尾根 790	鏡文中、平安	
39	尾尾 (ネゾー)	上善尾尾尾	宅地、畠、桑	尾根 790	鏡文前(謹職B) 鏡文中(五領・台、塚内・曾利) 後(塚の内)弥生中、平安	④吉木春重 ⑤根造 S 47.
40	寺 山	上善尾寺山	宅地、桑	" 795	鏡文中、平安	
41	江 戸 山	下善尾江戸山	桑	" 780	鏡文前(十三番堤)中(曾利) 弥生中、平安	
42	西 堀 込 南	上善尾西堀込	桑	" 800	弥生中	
43	西 堀 込 北	上善尾西堀込、高原	桑、畑	" 810	鏡文前(謹職B)中(五領・台、曾利)	④高原 S 38. S 47.
44	上 駒 場	上善尾上駒場	桑、牧草	丘陵 840	弥生中	
45	穴 之 津	上善尾穴之津	桑、牧原	尾根 840	鏡文中(五領・台)	
46	西 三 嵩 七	上善尾西三嵩七	桑、畑	" 840	鏡文前(謹職C)中(五領・台) 平安	
47	御 沢 北	松向御沢	桑、山林	斜面 820	鏡文中(五領・台)	
48	宝 + 春	松向宝+春	桑、畠	800 800	鏡文中、古墳時代	
49	本 村	松向本村	桑、宅地	" 780	平安	
50	前 田 北	下善尾前田北	桑、宅地、水田	" 770	鏡文前(謹職B)中(曾利) 平安	
51	森 町	松向西町	桑、畠	" 770	鏡文中(五領・台、曾利)平安	
52	前 田 南	下善尾前田南	水田、畑、桑	丘陵 750	鏡文中(曾利)後(塚の内)平安	
53	轟 原	下善尾轟原敷	畑、宅地	斜面 740	鏡文中、平安	
54	向 原	下善尾植木林向原	桑、山林	丘陵 740	鏡文中(塚内)弥生中	
55	須 佐 津 南	下善尾須佐津	山林、桑、牧原	尾根 710	鏡文中、弥生中	
56	須 佐 津 北	下善尾須佐津	桑、山林	" 730	鏡文中	
57	横 木 山	松向横山	桑、山林	斜面 810	鏡文中	
58	杉 の 木 平	松向杉の木平	桑、畑	" 810	(旧石器)鏡文中、平安	
59	御 沢 南	松向御沢南	桑、山林	尾根 810	鏡文中	④柳沢 S 47.
60	神 田	松向神田	桑、牧草	" 840	鏡文晚、弥生中、平安	④神田とは別遺跡
61	小 野	上善尾女奴区小野	桑、畑	" 870	鏡文中(井戸尻、曾利)平安	
62	広 面 南	松向広面	桑、畑、山林	丘陵 710	鏡文中(曾利)平安	
63	広 面 北	松向広面	桑、畑	高地 710	平安	
64	旌 八 田	上善尾女取(×)旌八田	桑、畑	尾根 910	鏡文中(曾利)晩(末)弥生中	④篠原御料地 S 38. S 47.
65	上 田	尾根上田	宅地、畑	斜面 890	鏡文中(曾利)平安	
66	天 神 森	尾根天神森	宅地、畑	斜面 900	鏡文中(井戸尻)弥生	
67	四 上	尾根西上	宅地、畑	山根 920	鏡文中	削平されて消滅か(?)

III. 遺構

1. 壁穴住居址

第2号住居址（第4図）

平面プランは南北 5.2 メートルを測り、隅丸方形を呈すると考えられる。主軸方向はN—95°—Wを示している。壁は床面から外傾斜しながら立ち上がり、壁高は40センチを測る。床面はロームに白色粘土が混入した状態で平坦に固くしまっていた。柱穴は1個確認され、径40×50センチの円形を呈し、深さは70センチを測る。柱穴の底には10×30センチの平石が置かれていた。

ピットは東壁の中央下に直径70×70センチの隅丸た形を呈し、深15センチを計測して検出された。断面形は皿状を呈する。ピットの覆土は5層に分かれ、焼土を基調とする土層に炭化物を含み、中層には焼けたロームブロック、下層には多量の炭化物がみられた。底面及び壁は焼成を受けて硬化している。本ピットの周辺を中心に数個の鉄滓が出土し、数片の鉄片も認められることから小鍛冶用の炉の可能性がある。本ピットの北側で東壁に寄りつくようにして、20~40センチの角礫があり、上面はなにかでたたかれのような剥離痕が明瞭に残り、小量の鉄分が付着し、一部は赤く変色していた。小鍛冶の作業に関係する台石と考えられる。

カマド

カマドは、東壁の南側に構築され、全長 1.4メートル、幅50センチの石組粘土カマドである。カマドの袖部は、平石を芯に白色粘土とロームで固めたものであった。焚口部は両袖部に位置するもので、焼土が厚く堆積していた。この焚口部の前に張り出した形で椿円形の掘り込みがある。床面からの深さ25センチで皿状を呈している。支脚は幅約10センチ、長15センチの長方形を呈した角礫である。煙道部は、壁体を半円状に若干掘り込み底部は椿円形を呈し、底部から緩らかな傾斜をもつて立ち上がっている。火床部は壁下の床面を椿円形に掘り溝めたものである。本カマドは袖部、煙道部が強い熱をうけて赤変して、ボロボロした状態となっている。

出土遺物（第10図、第11図、第12図）

本住居址より出土した遺物は、土師器壺、土師器甕、須恵器壺、須恵器甕、綠釉陶器、鉄滓で総数 240点であった。出土遺物のうち35点を精選して実測に示した。

第5号住居址（第5図）

平面プランは、ほぼ正方形で各壁の長さはそれぞれ、東壁 4 メートル、南壁 4.4 メートル、西壁 4.4 メートル、北壁 4.2 メートルである。主軸方向はN—65°—Wを示す。壁はほぼ垂直に

立ち上がり、現在高は約60センチを測る。壁際には壁溝が巡る。壁溝幅20~30センチ、深さ15~20センチを測り、断面形はU字形を呈する。床面は全体に白色粘土と黒褐色土を混ぜた土を貼床として使用しているが、遺存状態は全体に軟弱で悪い。柱穴は、認められないが、床面直上に15~20センチ人の扁平な石が北軸付近と住居の中央、又南壁の東隅に認められ、石の位置、形態、石の大きさ等から、本住居址に認められた石は礎石としての用途をもつたものと考えられる。ピットは東南隅に直径60~100センチの不整円形を呈し、深さ25センチを測り検出された。

カマド

カマドは東壁の南寄りにあり、全长 1.5メートル、幅80センチの規模を有する。遺存状況は悪い。壁体を幅50センチ、凸字形に約20センチ切り込んで煙道部を作る。袖部は火床部の両側に平石を立てて、それを被うようにして白色粘土、ロームブロックを構築材とし使用していたものと思われる。天井部は既に崩落し、旧状をとどめないが、白色粘土、ロームブロックと平石が構材となっていたと考えられる。支脚は検出されなかつた。火床部は煙道部下の床面を50~70センチの楕円状に掘り込んでいる。煙道部は、燃焼部より急激に立ち上がり、断面はU字形を呈する。焚口部は加熱による赤化現象が著しく認められた。

出土遺物（第13図）

本住居址からは、土師器壊、土師器壺、砥石等総数約50点が出土した。このうち図示したのは土師器11点と砥石 1点である。

第6号住居址（第6図）

平面プランは東壁 4.2メートル、南壁 4.4メートル、西壁 4.4メートル、北壁 4.3メートルを測り、南北にやや歪んだ方形を呈する。主軸方向はN=68°~Wを示す。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり現在高は、50センチを測る。壁溝は4壁下を一周しているが、幅10~20センチと一定ではなく、深さは10センチ内外である。床面は堅く踏み固められ、若干の凹凸はあるものおおむね平坦であった。柱穴と考えられるピットは東壁の中央下、南壁の中央付近、西壁コーナー付近の3ヶ所で検出された。ピット1は東方向に傾斜をつけて掘り込まれ、径30センチ、深さ48センチの円形を呈する。ピット2は径15×20センチの円形を呈し、10センチの深さを有す。P3は西壁より続く溝の先端につくピットで円形を呈し、径20センチ、深さ25センチを測る。東壁より北壁に平行にのびる溝があり、溝は一見、間仕切りのように見えるが、本住居址の規模から考えて、拡張による何らかの痕跡を示すものかよくわからない。住居址の中央部に径80~90センチ、深さ15センチの不整円形を呈するピットが認められ、ピットの覆土は焼土と灰層を中心としたもので、ピット内には2個の平石がみられ、ピットの壁から底にかけて赤く焼け

変色していた。このピットの東上に25~30センチの平石が据えられ、平石の上面は剥離痕があり、一部に鉄分が付着していた。又ピットと平石の周辺からは数個の鉄滓が出土している。ピットは小鎌治用の炉であり、平石は台石と思われる。

カマド

本住居址のカマドは東壁の南側に構築され、全長 1.4メートル、幅50センチの石組カマドである。極めて良好な遺存状態で検出された。カマドを構成する上層はやや黒味をおびている。袖部の芯には平石を2枚重ね合わせのように配し、それを白色粘土、ロームブロックを混ぜた土により補強している。火井部はすでに崩落していないが、一部に、30~50センチの石を使用し、アーチ状に袖部にのせられていた。燃焼部は最大幅50センチ、奥行1メートルである。焚口部は床面を約10センチ掘り込み、平面は方形を呈する。焚口部の両壁は火をうけて堅くしまっている。カマドの中央には多角柱状の角礫を直立させ支脚としている。煙道部は壁を約30センチ掘り込まれ、急傾斜をもつて立ち上る。

出土遺物（第14図、第15図）

本住居址より出土した遺物は、土師器、須恵器であり、総計 220点に達するが、完形品は僅かである。

第7号住居址（第7図）

平面プランは、東壁 2.4メートル、南壁 2.6メートル、西壁 2.4メートル、北壁 2.4メートルの隅丸方形を呈している。主軸方向は、N-69° - Wを指示する。壁は床面より垂直に立ちがり、壁高は約40センチを測る。壁体はやや軟弱である。床は比較的良好で、ロームブロックと白色粘土を使用して貼床にしており、中央部分は非常に堅く、周辺部になるにつれて黒色が混入し、軟弱な状態となる。壁溝は幅15~20センチ、深さ約8~10センチで全周する。断面形はU字状を呈している。柱穴は住居址内の精査にもかかわらず確認することはできなかった。柱穴は認められなかったが、北壁の西側に2個の上面が平坦な平石が置かれ、礎石的な用途をもつものかもしれない。

カマド

カマドは東壁の南側にあり、全長1.15メートル、幅1メートルの規模を有する。遺存状況は非常に悪い。煙道部は壁を20センチ、幅40センチを計測する。袖部は、地山を整形して構築したように見受けられるが、袖となる石を抜きとつものと思われる。焚口部に長さ50センチ、幅25センチの石が落ちこんでいた。燃焼部は床面を約10センチ掘り込み、南北60センチ、東西1メートルの楕円形を呈しており、焼土の多量な堆積がみられた。焚口部は、床面を掘り込ん

であり、焼土、白色粘土、炭化物の堆積が見られる。

出土遺物（第16図1～3）

本住居址の出土遺物は、土師器で総数30点を数えた。出土遺物のうち図示できたものは3点である。

第8号住居址（第8図）

本住居址は9号住居址を切り込んで構築されている。平面プランはわかりにくく、不整方形を呈している。壁は直に落ち込み、壁高は40～60センチを測る。床面はロームで軟弱である。柱穴、カマド、壁溝も認められなかつた。

出土遺物（第16図4）

出土遺物は灰釉陶器片1点である。

第9号住居址（第8図）

南半分は第8号住居址によって切断されている。平面プランは東壁3.6メートル、北壁3.8メートルで方形を呈する。主軸方向はN-60°Wを示す。壁はソフトロームより切り込まれており、壁高は約40センチで、堅緻である。床面はロームブロックに黒褐色土の混在する土をもつて貼床としている。全体的に凹凸が著しい。柱穴はない。壁溝は第8号住居址部分を除いて、周つている。幅は一定せず15～30センチとなる。深さは5～8センチである。

カマド

カマドは、東壁中央部よりやや南に寄った位置に設けられ、全長1.2メートル、幅1メートルを測る。煙道部は、壁を約20センチ掘り込み、奥壁から急傾斜をもって立ち上がっている。煙道部の傾斜に沿って、平石が置かれ、煙道の一部を形成していると推測される。袖部は角礫状の平石を芯にして、白色粘土、ロームブロックで支える形である。焚口部の規模は比較的小さく、幅40センチ程である。袖部の内側は火熱をうけて若干赤化して堅くなっている。燃焼部は焼土が多く認められ、ここを覆っていた天井部の一部の石が残存していた。支脚を埋め込んでいたと思われるピットが検出されている。

出土遺物（第16図5～8、第17図）

本住居址からの出土遺物は、土師器、灰釉陶器で総数160点出土した。そのうち、実測図示したものは、土師器19点、灰釉陶器3点である。

第10号住居址（第9図）

本住居址は、第11号住居址の西側の半分以上を壇して構築されている。平面プランは、東壁4.4メートル、南壁2.4メートル、内壁4.5メートル、北壁2.6メートルを測り、長方形を呈する。主軸方向はN-72°-Wを指示する。壁は若干の傾斜をもつ立ち上がり、壁高は約20センチを測る。壁高は全周し、幅5~30センチ、深さ10センチ前後で一定していない。柱穴は認められない。床面は全体に踏み固められ平坦を呈する。東壁と西壁の隅に平石が置かれており、前述の住居址と同様に礎石の一部とも考えられる。

カマド

東壁の南コーナーにあり、カマドの遺存状態は悪い。全長90センチ、幅65センチを測る。壁を約25センチ掘り込んで煙道部とし、急角度で奥壁に沿って立ち上がっている。床面を皿状に約5センチ掘り下げて、焚口部としている。袖部は平石を芯に使用していたと思われ、北側の袖部には、袖石を抜いたピットがみられた。燃焼部には長さ16センチ、幅5センチで、高さ25センチの平石を支脚として置いている。

出土遺物（第16図10~12）

本住居址から出土した遺物は土師器、灰釉陶器で、総数10点であった。実測図示したものは3点である。

第11号住居址（第9図）

西側を第10号住居址により切り込まれている。平面プランは、東壁3メートル、南壁3.2メートルの隅丸方形を呈する。主軸方向N-69°-Wである。床は比較的良好で、ロームブロックと白色粘土を用いて貼床としており、南側倒で軟弱、東壁側では堅い。壁はソフトロームを切り込んで作られており、壁高25センチ位で明瞭な立ち上がりをもつ、柱穴と壁溝は認められなかった。

カマド

東壁の南寄りに位置し、全長60センチ、幅70センチを測る。袖部は南側の袖石を1個残すのみで、他はすべて持ち去られている。壁を約18センチほど掘り込んで煙道部をつくり、段をもって急に立ち上がる。

出土遺物（第16図13~16、第18図、第19図6~7）

本住居址より出土した遺物は土師器で総数20点を数える。実測図示したものは11点である。

第12号住居址（第9図）

本住居址は農道工事によりほとんどが削平されていて、北壁の一部と東壁を残すのみである。平面プランは残存部から四角形を呈するものと推定される。壁は堅くしまり、壁体はやや外傾斜しながら立ち上がる。壁高は15~25センチを測る。床面は凹凸のない比較的平坦な床である。部分的には軟弱な場所がみつけられた。壁溝は残存部で幅10~20センチ、深さ5センチ内で形態はU字状を呈する。

出土遺物（第19図1~4）

本住居址の出土遺物は総数約30点を数えるが、実測図示したものは4点であり、すべて土師器皿である。

2. 挖立柱建物址

第1号掘立柱建物址（第20図）

本建物址は昭和57年調査（農道拡張部分）によって検出した第1号建物址の残半分である。形態は3間（6.5メートル）×6間（9.5メートル）で主軸方向はN-33°-Wを向き、南北に長い長方形を呈している。柱間寸法は梁行0.8~1.4メートル、桁行1~3メートルである。柱穴の覆土は上層に炭化物を少量含む黒褐色土が堆積し、下部にはロームブロック含む黄褐色土が認められた。柱痕は径の大きい内側の3個より検出された。柱穴の掘り方は円形となり、外側の柱穴に比べ内側の柱穴は2~3倍と大きく、深さも深い。外側の径の小さい柱穴は底と考えられる。

出土遺物

出土遺物としては2~3の柱穴より少量の土師器片が検出されてれているが、図示できる遺物は出土しなかった。

第2号掘立柱建物址（第21図）

本建物址は計10個の柱穴がやや不規則に配列されたもので、主軸方向をN-24°-Eにもつ、2間（2.8メートル）×3間（4.4メートル）の建物址である。土な柱穴の径は約30~40センチ、深20~60センチを測る。柱間寸法は、梁行1.6メートル、桁行0.6~2メートルである。柱穴の掘り方は円形を呈する。

出土遺物

出土遺物は土師器、須恵器破片が出土しており、平安時代のものと考えられる。

第3号掘立柱建物址（第21図）

形態は1間（3メートル）×1間（2.8メートル）の不整正方形を呈する掘立柱建物址である。主軸方向はN-31°Eである。掘り方はほぼ円形を呈し、径は約40センチ前後を測る。柱間寸法は、梁行2.8メートル、桁行3メートルである。柱穴内の覆土は黒褐色土の単層であった。

出土遺物

出土遺物は検出されていないが、時期は前述した掘立柱建物址の時期と同時であると考えられる。

第4号掘立柱建物址（第22図）

形態は2間（4.8メートル）×3間（5.6メートル）で長方形を呈する。主軸方向はN-69°-Wで他の掘立柱建物址の主軸方向と異なり、東西方向を示す。柱間寸法は梁行2.2メートル、桁行2メートルである。掘り方は円形を呈し、径32～60センチ、深さ12～42センチを測る。柱穴内の覆土は黒褐色土が主体となり、下層になるにつれロームが混ざってくる。

出土遺物

出土遺物は2個の柱穴より少量の土師器片が検出された。時期は平安時代に比定される。

第5号掘立柱建物址（第22図）

形態は2間（5.2メートル）×2間（6メートル）で主軸方向N-67°-Wの掘立柱建物址である。柱間寸法は梁行2.4メートル、桁行2メートルであり、柱穴の掘り方はほぼ円形を呈し、径は28～50センチ、深さ20～40センチを測る。中央よりやや北側に偏して束柱が検出された。

出土遺物

出土遺物は柱穴内より土師器の破片数点が検出された。破片が小破片のため図示できなかった。時期は平安時代であると思われる。

3. 土師器窯址

本址は土師器などの土器の焼成場であり、2基を検出した。

第1号土師器窯址（第23図）

平面形態は不整な楕円形を呈し、径 1.4メートル×2.6 メートル、深さ15センチを測る。覆土は炭化物、焼土、灰が多く堆積し、複雑な層序を呈している。

出土遺物（第19図5）

本址からの出土遺物は土師器蓋と土師器壺の破片 2点である。

第2号土師器窯址（第23図）

平面形態は楕円形を呈し、径 1.5×2.2 メートル、深さ40センチを測る。覆土は焼土、灰が主体となって層を構成している。壁は外にひらくように緩やかに立ち上っていく。

出土遺物

本址からの出土遺物は土師器壺の破片数点であるが小破片のため実測図示できなかった。

4. 土 壤

本遺跡から検出された土壙は10基検出された。

第3号土壙（第24図）

径36×80センチ、深さ36センチを測り、平面形態は円形を呈する。底面は平坦で、壁は底面より傾斜をもって立ち上がる。

出土遺物

出土遺物は検出されなかった。

第4号土壙（第24図）

径48×60センチ、深さ32センチを測り、平面形態は不整円形を呈する。壁はやや傾斜をもって立ち上がり、現存壁高は20~28センチを測る。底面は北から南にかけて低くなる。

出土遺物

出土遺物は検出されなかった。

第5号土壙（第24図）

径 1.2×0.8 メートル、深さ20センチを測り、平面形態は不整長方形を呈する。壁は底面よ

り緩やかに立ち上がっている。

出土遺物

出土遺物は検出されなかった。

第6号土壙、第7号土壙、第8号土壙は規則正しく一列に並んでいる。

第6号土壙（第24図）

平面形態は隅丸方形を呈する。径 1.2×1.4 メートル、深さ24を測る。壁は外にやや傾斜をもって立ち上がる。底面は凹凸がみられる。

出土遺物（第25図1、4）

出土遺物は青銅製煙管と寛永通宝1枚が出土した。煙管は「吸い口」部で、長さ 9.2センチ、最大径 1センチ、最小径 0.5センチの大きさである。寛永通宝は、「古寛永通宝」と「新寛永通宝」の二つに大別できる。本土壙より出土した寛永通宝は古寛永通宝で、寛永13年以降約30年の間鋳造されたものである。

第7号土壙（第24図）

平面形態は隅丸方形を呈し、径 1.2×1.6 メートル、深さ20センチを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底は平坦である。

出土遺物（第25図3）

出土遺物は寛永通宝1枚が底より出土した。本土壙より出土した寛永通宝は、いわゆる文錢で、寛文8年（1688）から16年間にわたって江戸の亀戸村で銭造されたものである。

第8号土壙（第24図）

平面形態は隅丸方形を呈する。径は 1.2×1.4 メートル、深さ23センチを測る。壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

出土遺物（第25図2）

本土壙より出土した遺物は燧鉄1個で、長さ 6センチ、最大幅 1.4センチで比較的原形を保つ。形態は上部に三ヵ月形のくり込みをもつ長三角を呈する、断面は上部より下部にいくに従って太くなる。一緒に小さい燧石と思われる角ばった小石が出土した。

第9号土壙（第24図）

平面形態は不整橢円形を呈し、径 1.1×1.3 メートル、深さ56センチを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底はやや起伏がみられる。中央に大形ピットを有する。

出土遺物（第26図2）

本土壙からは、中央のピット中より繩文地文で、S字状沈線文が施されている曾利II式土器が正位に埋置されていた。

第10号土壙（第24図）

平面形態はほぼ円形を呈し、最大径 1.2 メートル、深さ30センチを測る。壁は垂直に立ち上がる。底は平坦である。

出土遺物（第26図1）

出土遺物は土壙中央より曾利II式土器の大甕が正位に埋置されていた。

第11号土壙（第24図）

平面形態は不整円形を呈し、径 0.9×1.6 メートル、深さ26センチを測る。壁は底よりゆるやかに立ち上がる。底は平坦である。

出土遺物（第27図1）

粘板岩ホルンフェルス製の短冊形を呈する打製石斧1点が出土した。

第12号土壙（第24図）

平面形態は円形を呈し、径 0.95×1 メートル、深さ45センチを測る。壁はやや傾斜して直線的に立ち上がる。底は平坦である。

出土遺物（第27図2、3）

出土遺物は、石質が粘板岩の打製石斧2点である。

5. 集石遺構

本遺構は2基検出された。

第1号集石遺構（第23図）

集石は東西約80×南北約40センチの範囲にあり、10~20センチの角礫が積み重なつて、土壙の底まで達している。集石の下は径45~90センチの長楕円形を呈する土壙があり、最大深さは20センチを測る。

出土遺物（第27図4、5）

出土遺物は安山岩製の凹石2点である。

第2号集石遺構（第23図）

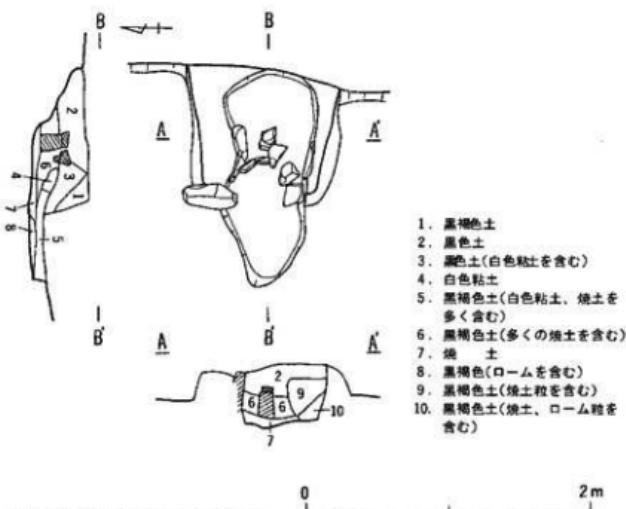
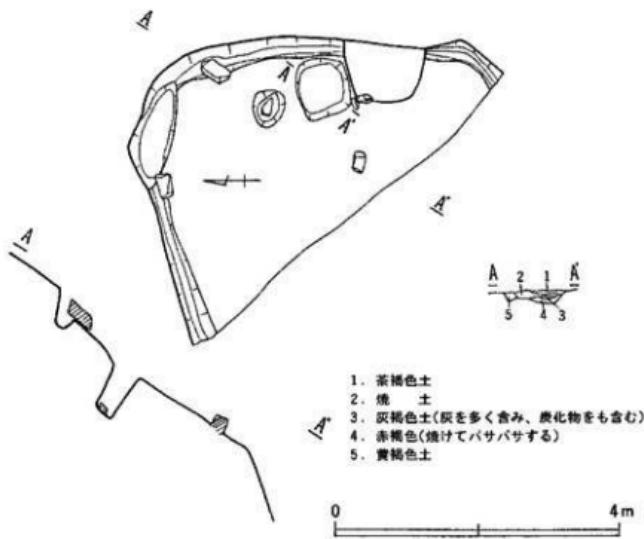
集石は東西約50×南北約60センチの範囲にある。集石は平な礫が用いられている。集石下には径50×70センチの不整楕円形を呈する土壙があり、礫は底の一部に達している。

出土遺物

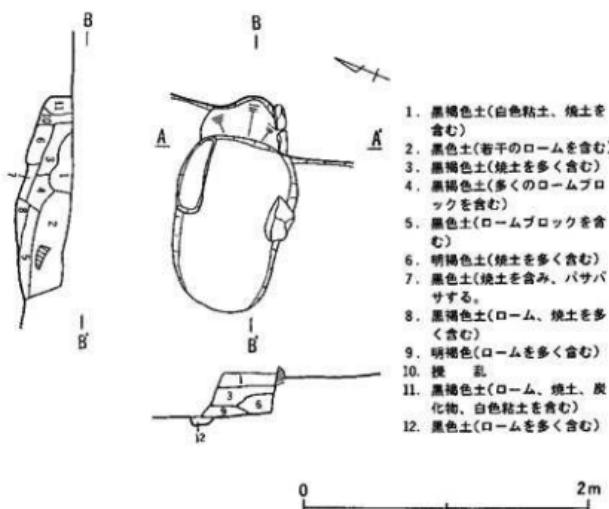
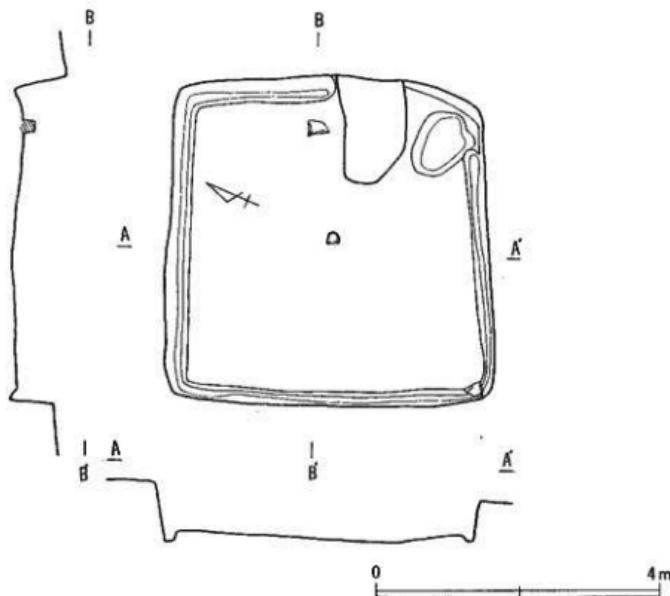
出土遺物は何ら検出されなかった。

遺構外出土遺物（第25図5）

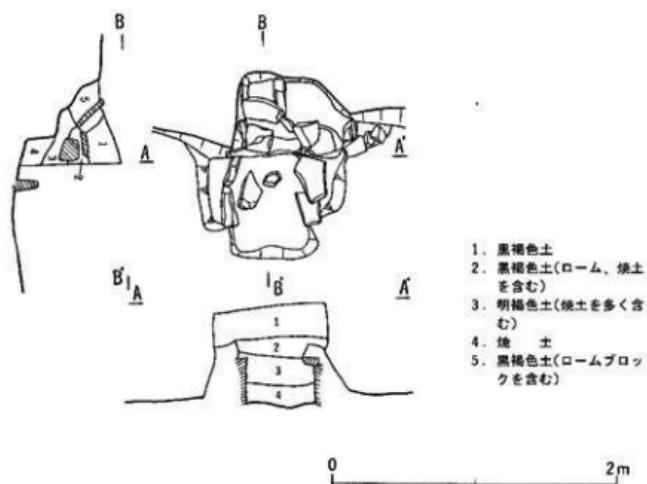
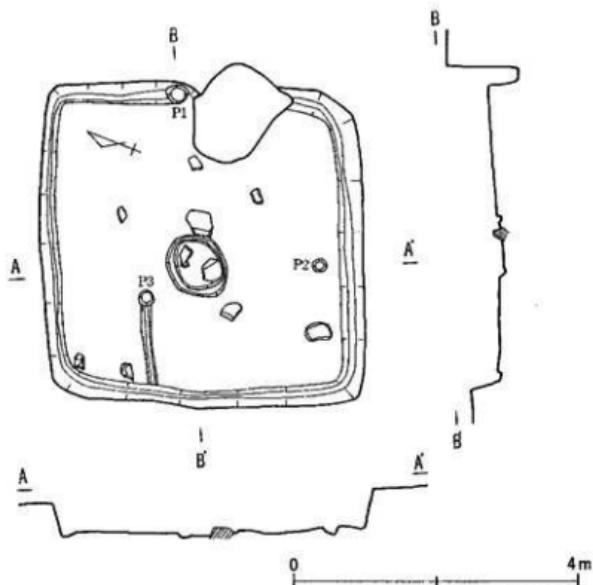
天保通宝1点が第8号土壙付近で表採された。



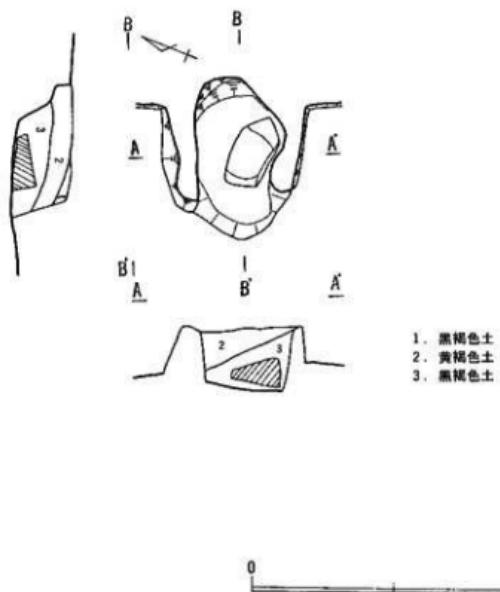
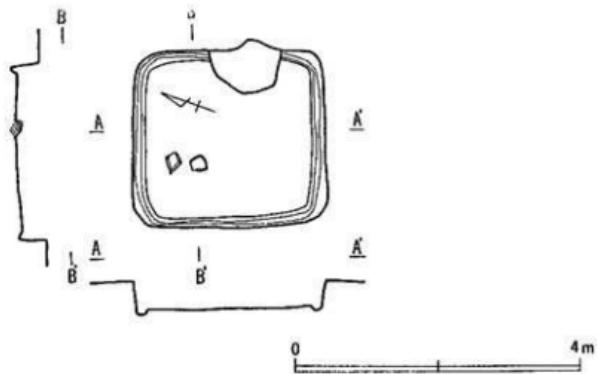
第4図 第2号住居址平面図とカマド平面図



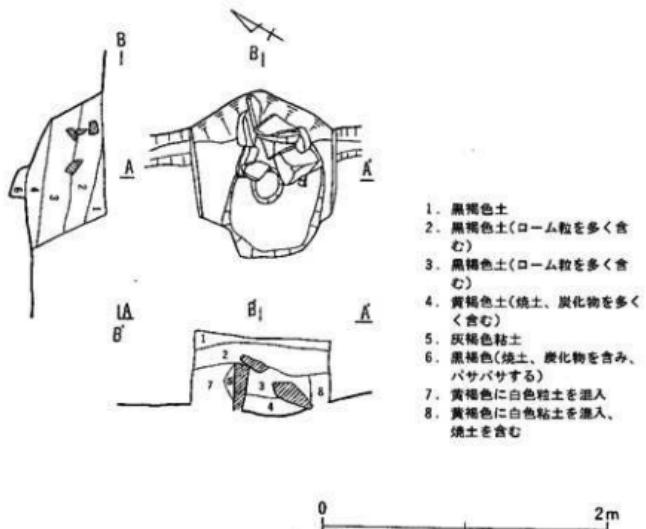
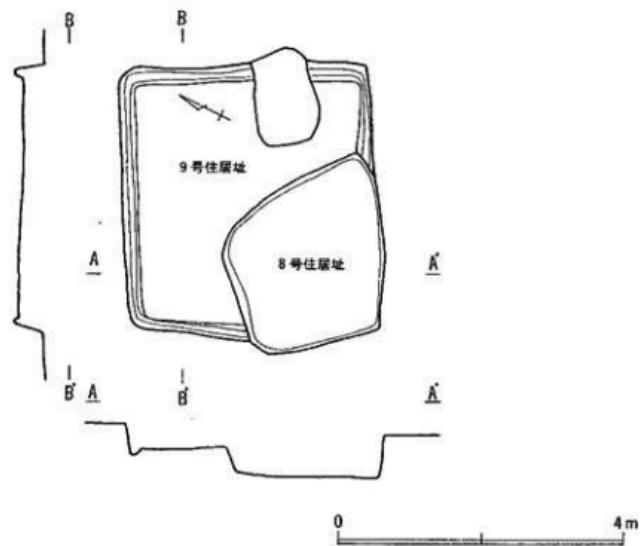
第5図 第5号住居址平面図とカマド平面図



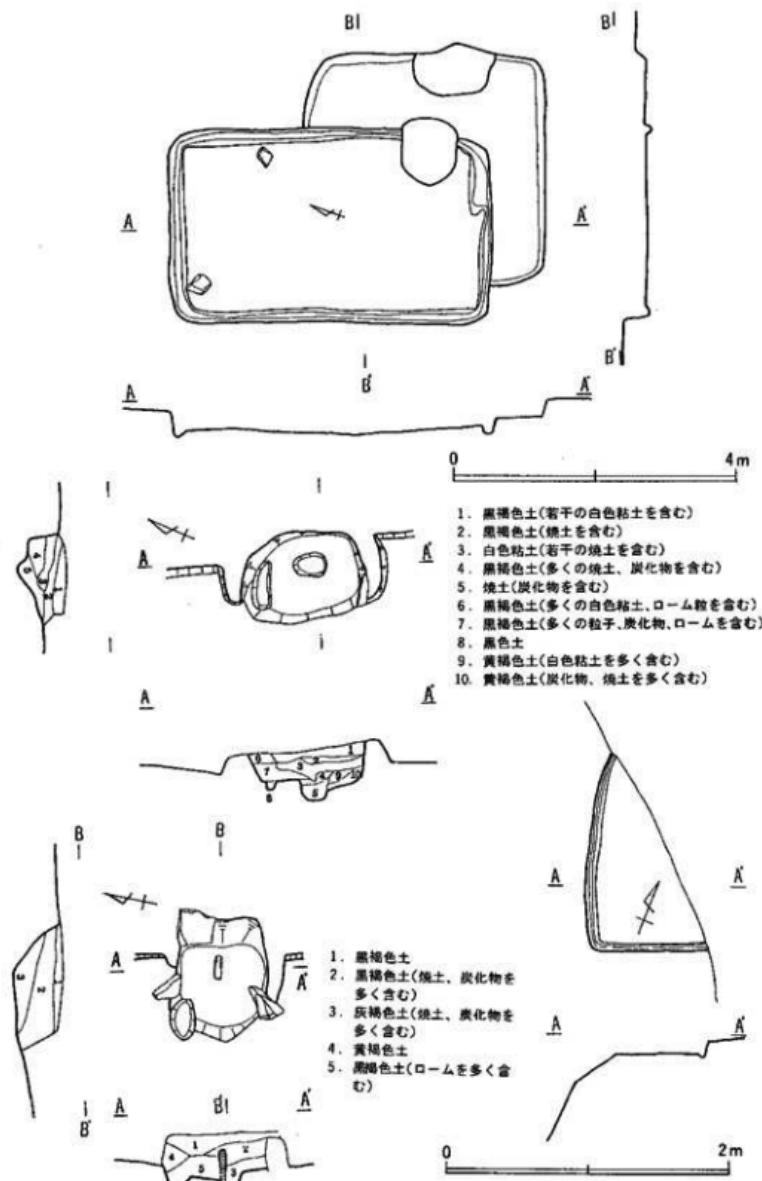
第6図 第6号住居址平面図とカマド平面図



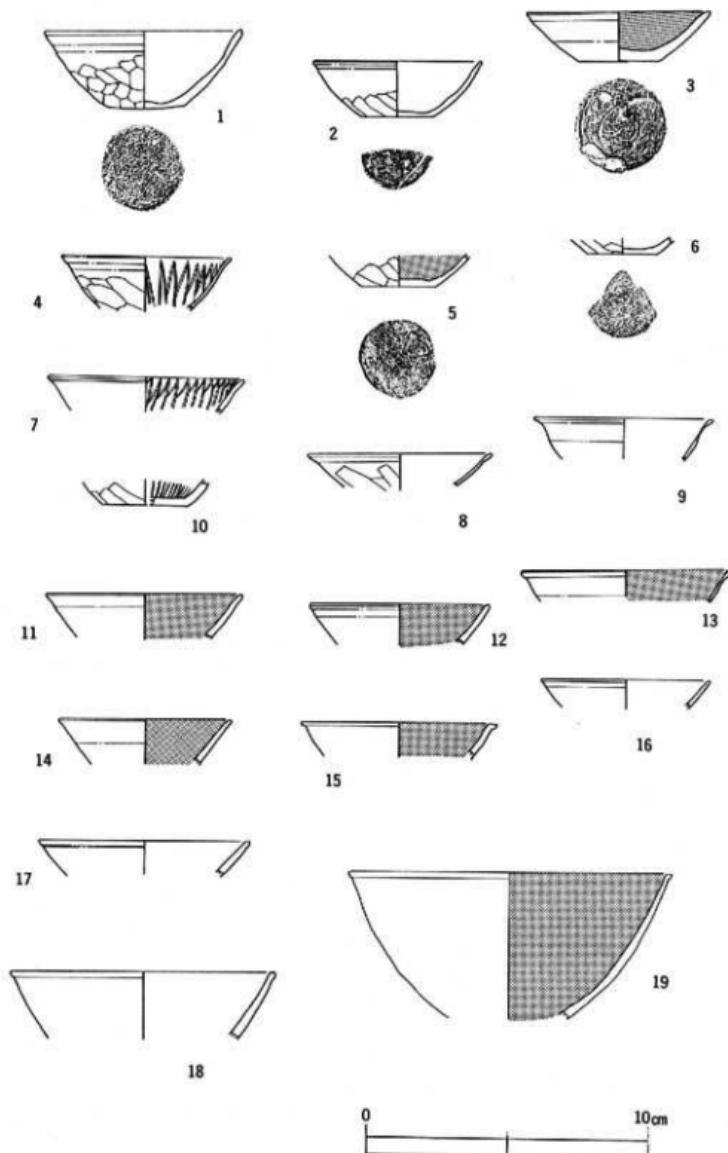
第7図 第7号住居地平面図とカット面図



第8図 第8号・9号住居址平面図と9号住居址カマド平面図



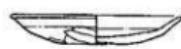
第9図 第10号・11号・12号住居址平面図とカマド平面図



第10図 第2号住居址出土遺物(1)



20



21



22



24



25



23

26



27



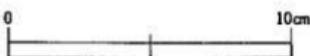
28



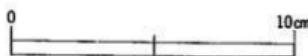
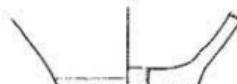
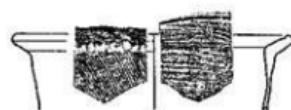
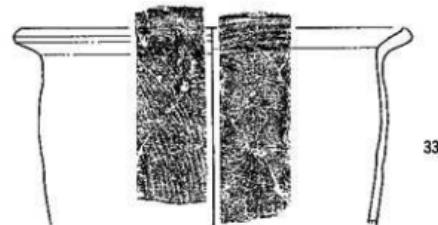
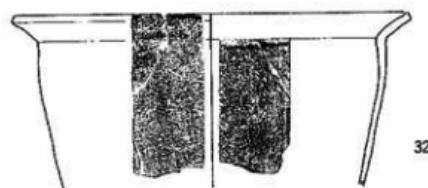
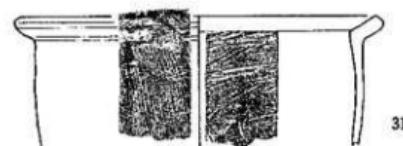
29



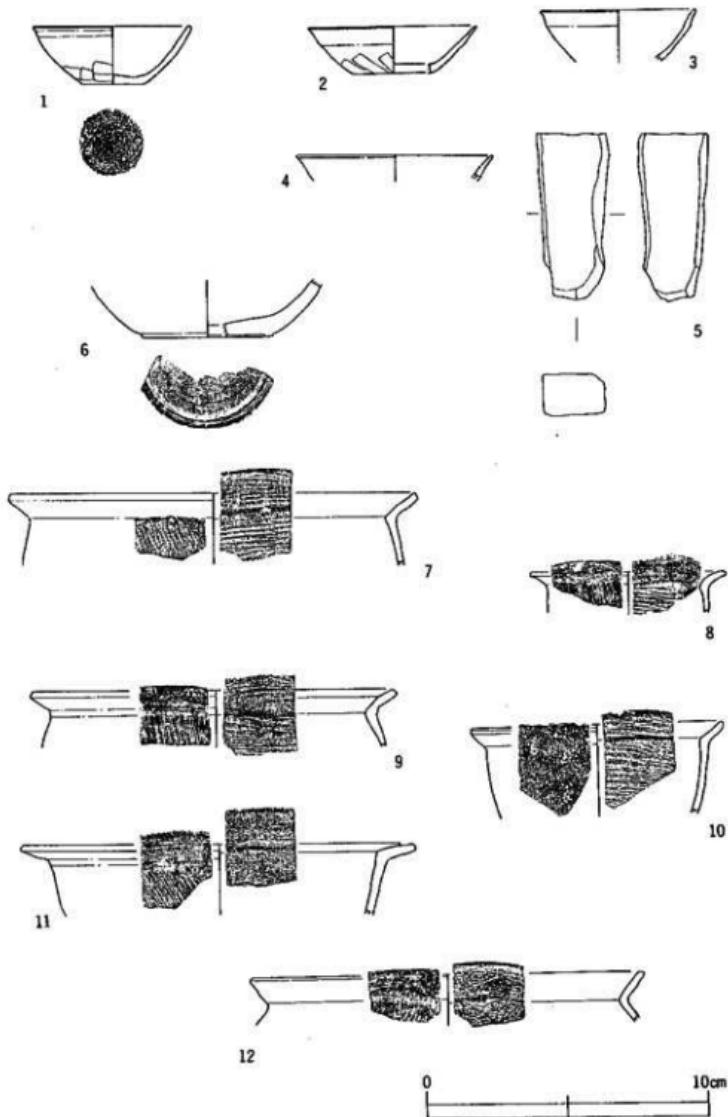
30



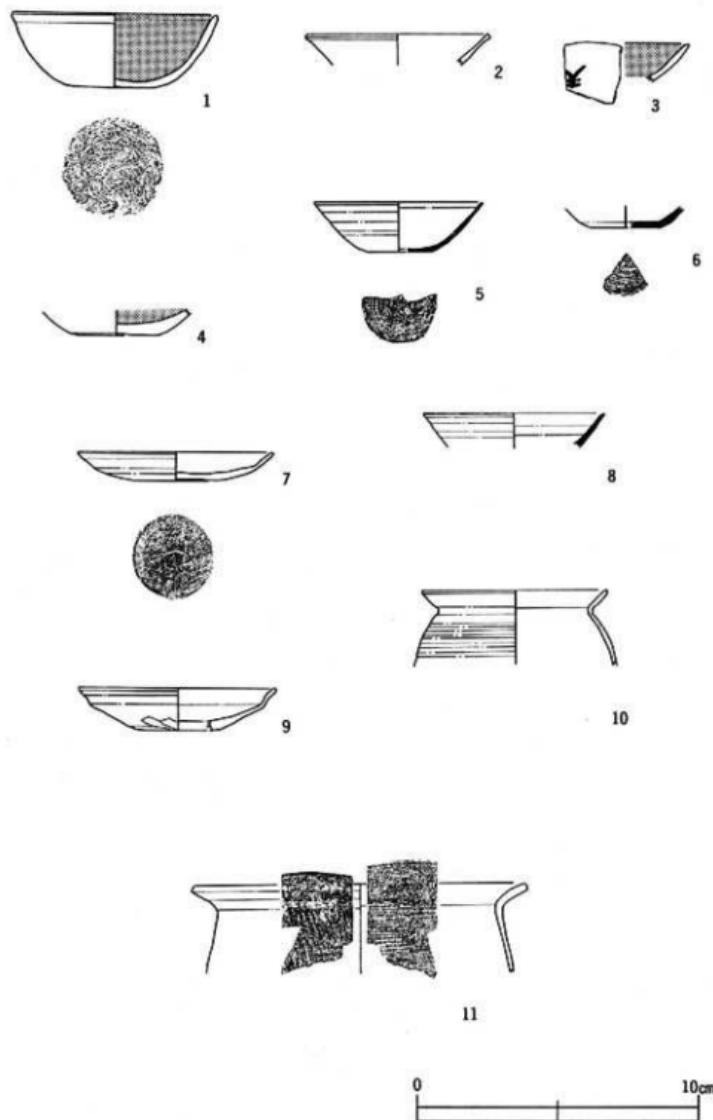
第11図 第2号住居址出土遺物(2)



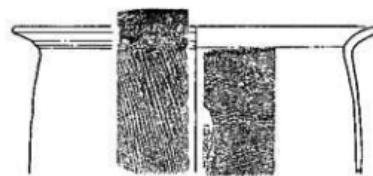
第12図 第2号住居址出土遺物(3)



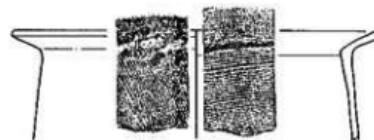
第13図 第5号住居址出土遺物



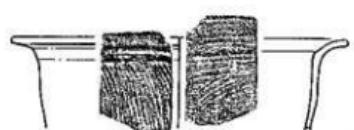
第14图 第6号住居址出土遗物(1)



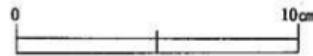
12



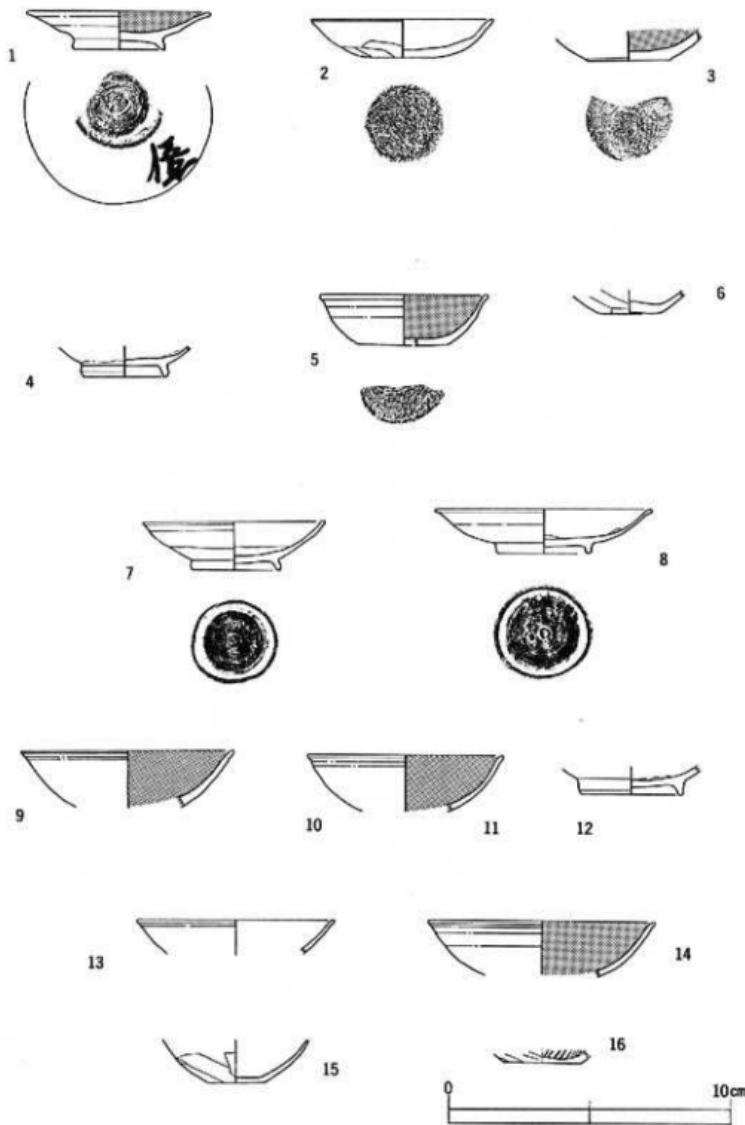
13



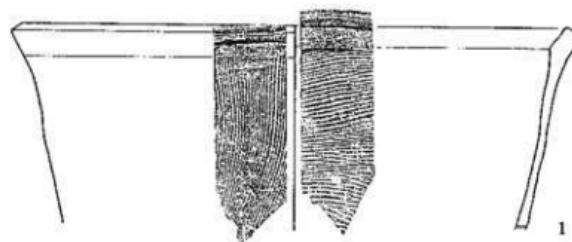
14



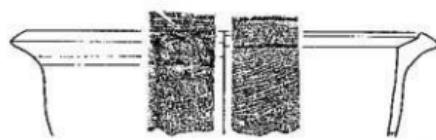
第15図 第6号住居址出土遺物(2)



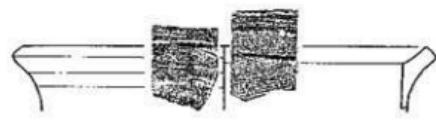
第16図 第7号(1~3)、8号(4)、9号(5~8)、10号(10~12)、11号(13~16)
住居址出土遺物



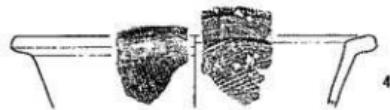
1



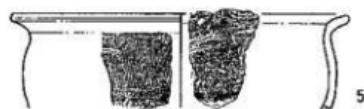
2



3



4



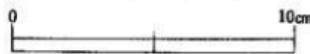
5



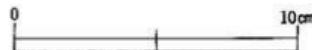
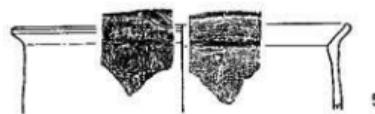
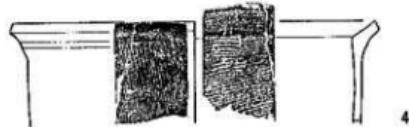
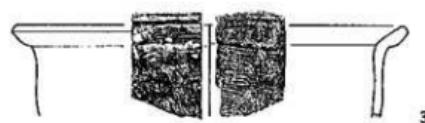
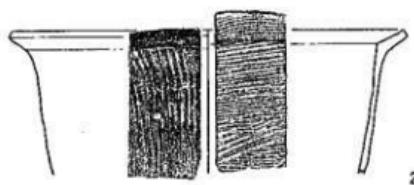
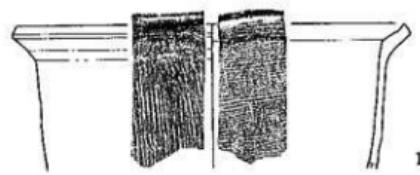
6



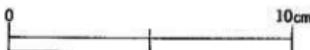
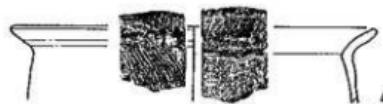
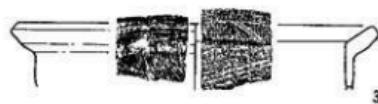
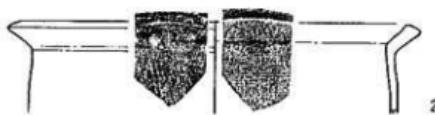
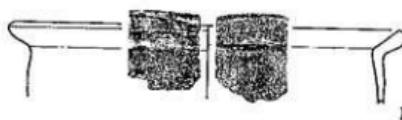
10cm



第17図 第9号住居址出土遺物



第18图 第11号住居址出土遗物



第19図 第11号（6～7）、12号（1～4）住居址、第1号土器窯址（5）出土遺物

図表 I (出土遺物表)

拂岡 番号	器形 器形	基 底 高 さ cm (底 延長)	上器の観察	器形の特徴	調 整			造構	備考
					外 面	内 面	底		
10回 1	环	14.0 5.6 5.5	粘土 精々されて いる 色調 变成 良好	口縁部尖縫	口縁部、ロクロ 横ナデ、器体下 半に斜位 ヘラ削り	ロクロ横ナデ	回転糸切り後手 持ちヘラ削り	第2 号住	
10回 2	环	12.0 4.0 5.0	粘土 砂粒を多く 含む 色調 赤褐色 变成 不良	口縁部尖縫	口縁部、ロクロ 横ナデ、器体下 半に斜位 ヘラ削り	ロクロ横ナデ	回転糸切り後手 持ちヘラ削り	第2 号住	
10回 3	环	13.0 3.5 6.0	粘土 やや悪い 色調 内外 内黒色 变成 良好	口縁部尖縫で外反 する。	ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ 黑色研磨	回転糸切り 号住	第2 号住	
10回 4	环	12.0	粘土 精々されて いる 色調 变成 良好	口縁部丸縫	ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ後 花弁状暗文		第2 号住	
10回 5	环	— — 5.4	粘土 精々 色調 赤褐色 变成 良好		器体下位に斜位 ヘラ削り	ロクロ横ナデ	回転糸切り後手 持ちヘラ削り	第2 号住	
10回 6	环	— — 5.0	粘土 精々 色調 赤褐色 变成 良好		器体下位に斜位 ヘラ削り	ロクロ横ナデ	回転糸切り後手 持ちヘラ削り	第2 号住	
10回 7	环	14.0	粘土 精々 色調 赤褐色 变成 良好	口縁部尖縫	ロクロ横ナデ	花弁状暗文		第2 号住	
10回 8	环	13.0 —	粘土 精々 色調 赤褐色 变成 良好	口縁部五縫	ロクロ横ナデ ロクロ横ナデ 器体下位に斜位 ヘラ削り	ロクロ横ナデ		第2 号住	
10回 9	环	12.8	粘土 精々 色調 赤褐色 变成 良好	口縁部五縫部でや や外反する。	ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ		第2 号住	
10回 10	环	— 6.0	粘土 精々 色調 赤褐色 变成 良好		器体下位に斜位 のヘラ削り	ロクロ横ナデ後 方瓣状暗文	回転糸切り後手 持ちヘラ削り	第2 号住	
10回 11	环	14.0	粘土 砂粒を少く 含む 色調外赤褐色内黒色 变成 良好	口縁部丸縫	ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ 黑色研磨		第2 号住	
10回 12	环	13.0 —	粘土 砂粒を含む 色調 外赤褐色 变成 良好					第2 号住	
10回 13	环	14.8	粘土 精々 色調 赤褐色 变成 良好	口縁部五縫 (折り返し口縁に もみられる。)	ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ 黑色研磨		第2 号住	
10回 14	环	12.0	粘土 精々 色調 内黒色 变成 良好	口縁部九縫上部で 外反	ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ		第2 号住	
10回 15	环	14.0 —	粘土 精々 色調 外赤褐色 变成 良好	II縫部屈曲縫	ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ 黑色研磨		第2 号住	跡とも 見えら れる。
10回 16	环	— —	粘土 精々 色調 黄褐色 变成 良好	口縁部丸縫	ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ		第2 号住	
10回 17	环	15.0	粘土 精々 色調 茶褐色 变成 良好	口縁部尖縫	ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ		第2 号住	
10回 18	鉢	19.0	粘土 精々されて いる 色調 赤褐色 变成 良好	口縁部屈曲口縫	ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ		第2 号住	
10回 19	鉢	23.0	粘土 砂粒を少く 含む 色調外赤褐色内黒色 变成 良好	口縁部屈曲口縫	ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ		第2 号住	

図表 II (出土遺物表)

番号	器形 法 器 高 度 cm (口径 底径)	上部の 離合	断形の 特徴	調 整			通病	備 考
				外面	内面	底		
11回 20	皿 12.0 2.5 3.5	粘土 精々されて いる 赤褐色 焼成 良好	口縁部尖線上部で 體体下反する。	ロクロ横ナダで 體体下反部位の ヘラ削り	ロクロ横ナダ	回転条切り後手 持ちヘラ削り	第2 号住	
11回 21	皿 12.0 2.5 5.0	粘土 精々されて いる 赤褐色 焼成 良好	口縁部半縁、内面 中央部で剛直なく 引けがみられる。	ロクロ横ナダで 體体下半に斜位 のヘラ削り	ロクロ横ナダ	回転条切り後手 持ちヘラ削り	第2 号住	
11回 22	皿 12.5 — —	粘土 精々されて いる 赤褐色 焼成 良好	口縁部丸縁 全体に厚い	ロクロ横ナダで 體体下半に斜位 のヘラ削り	ロクロ横ナダ		第2 号住	
11回 23	皿 12.6 2.5 —	粘土 精々されて いる 赤褐色 焼成 良好	口縁部丸縁、内面 中央部に剛直なく 引けをもつ。	ロクロ横ナダ	ロクロ横ナダ		第2 号住	
11回 24	皿 13.0 — —	粘土 精々されて いる 赤褐色 焼成 良好	口縁部五縁 上部で外反する。	ロクロ横ナダ	ロクロ横ナダ		第2 号住	
11回 25	皿 12.0 — —	粘土 精々されて いる 赤褐色 焼成 良好	口縁部玉縁	ロクロ横ナダ	ロクロ横ナダ		第2 号住	
11回 26	皿 13.0 — —	砂粒を含む 赤褐色 焼成 良好	口縁部半縁	ロクロ横ナダ	ロクロ横ナダ		第2 号住	
11回 27	瓶 — 6.0	粘土 精々されて いる 赤褐色 焼成 良好	高台部は貼り付け による。	ロクロ横ナダ	ロクロ横ナダ	回転条切り	第2 号住	
11回 28	瓶子 —	粘土 精々されて いる 赤褐色 焼成 良好		底位に平行叩き 文	ロクロ横ナダ		第2 号住	
11回 29	深鉢 陶器 —	粘土 色調 淡い緑 焼成 良好	口縁部玉縁				第2 号住	
12回 30	瓶 — 13.5	粘土 少量の小石 を含む 赤褐色 焼成 良好		體体下半に平行 叩き文を有する。	ロクロ横ナダ		第2 号住	
12回 31	土師 器蓋 —	砂粒・小石 を含む 赤褐色 焼成 良好	口縁部は肥厚し て外反する。並大径が口 縁部で段をもつ。	ロクロ横ナダ、 胴部板位の削毛 月	ロクロ横ナダ、 胴部板位の削毛 月		第2 号住	
12回 32	土師 器蓋 —	砂粒を含む 茶褐色 焼成 良好	口縁部がくの字状 で外反し、内面 口縁部で段をもつ。 並大径が口縁部 で段をもつ。	ロクロ横ナダで 胴部板位の削毛 月	ロクロ横ナダ		第2 号住	
12回 33	土師 器蓋 —	砂粒を多く 含む 赤褐色 焼成 良好	ロクロ横ナダで 胴部は肥厚し て外反し、内面 口縁部で段をもつ。 並大径が口縁部 で段をもつ。	ロクロ横ナダで 胴部は横位の削 毛目整形	ロクロ横ナダ		第2 号住	
12回 34	土師 器蓋 — 10.0	前子の砂粒 を含む 茶褐色 焼成 良好	ロクロ横ナダで 胴部がくの字状 で外反し。胴部で 段をもつ。 並大径が口縁部 で段をもつ。	前子の砂粒 を含む 茶褐色 焼成 良好	前子の砂粒 を含む 茶褐色 焼成 良好	削毛目による整 形が認められる。	第2 号住	
12回 35	甕 —	砂粒を含む 赤褐色 焼成 良好	ロクロ横ナダで 胴部がくの字状 で外反し。胴部で 段をもつ。	ロクロ横ナダで 胴部は横位の削 毛目整形	ロクロ横ナダ	削毛目による整 形が認められる。	第3 号住	
13回 1	环 11.0 4.1 4.4	粘土 精々されて いる 赤褐色 焼成 やや不良	口縁部丸縁	ロクロ横ナダで 器体下半に 斜位のヘラ削 り	ロクロ横ナダ	回転条切り後手 持ちヘラ削り	第5 号住	
13回 2	环 12.0 3.3 5.5	粘土 精々されて いる 赤褐色 焼成 良好	口縁部尖縁	ロクロ横ナダで 器体下半に 斜位のヘラ削 り	ロクロ横ナダ		第5 号住	
13回 3	环 11.0 — —	粘土 精々されて いる 赤褐色 焼成 良好	口縁部玉縁	ロクロ横ナダ	ロクロ横ナダ		第5 号住	

図表 III (出土遺物表)

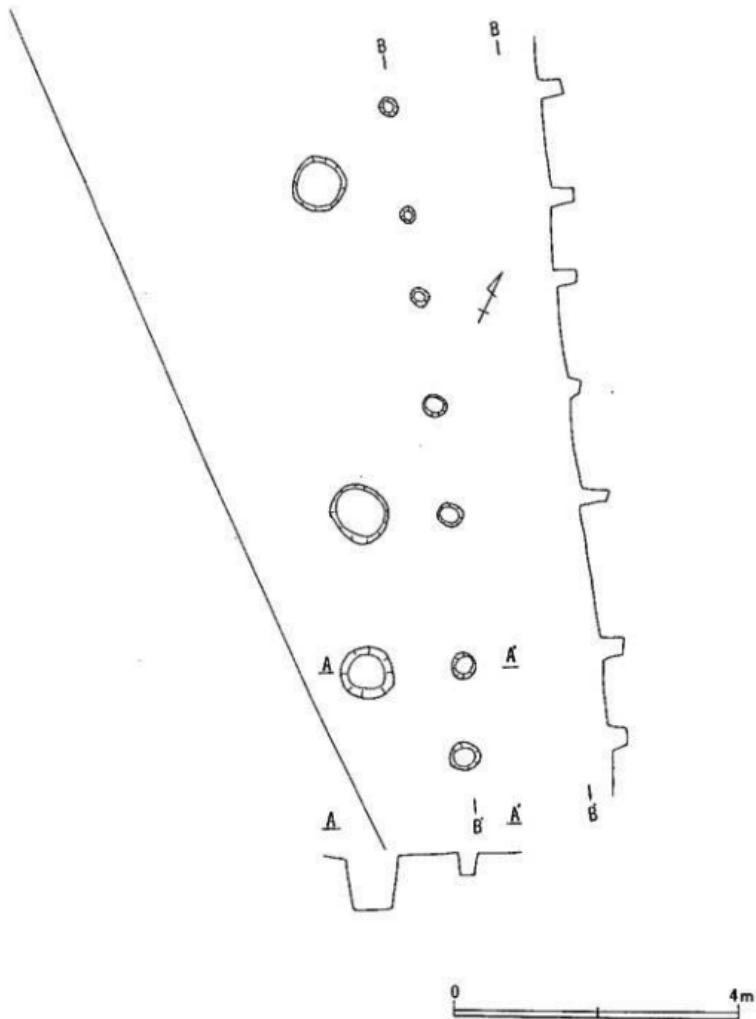
標印 番号	器形 基形	法 身 高 cm (武像)	土 器 の 類 別	器形の特徴	測 定 値			造構	備 考
					外 面	内 面	底		
13回 4	环	14.0	粘土 一 一	精々される 色調 赤褐色 焼成 良好	口縁部丸縁	ロクロ横ナギ	ロクロ横ナギ		第5 号住
13回 5	砾 石	長さ12.0 幅3.5 厚さ3.0	石質は硬質 砂岩						第5 号住
13回 6	高 台 坏	— 9.4	粘土 一 一	粘々 色調 赤褐色 焼成 良好	削りだし高台				第5 号住
13回 7	甕	28.5	粘土 一 一	砂粒を含む 色調 茶褐色 焼成 良好	口縁部は脚部と同 じにぎきで外反	ロクロ横ナギ 脚部縫合の刷毛 目	刷毛目整形		第5 号住
13回 8	甕	14.0	粘土 一 一	砂粒を含む 色調 内赤褐色 焼成 良好	口縁部は届出して 脚部縫合の刷毛 目	刷毛目整形			第5 号住
13回 9	甕	25.5	粘土 一 一	砂粒を含む 色調 茶褐色 焼成良好	口縁部が屈曲しゆ るやかに外反	ロクロ横ナギ 脚部縫合の刷毛 目	刷毛目整形		第5 号住
13回 10	甕	18.0	粘土 一 一	砂粒を含む 色調 茶褐色 焼成 良好	口縁部は薄く外反 する。	ロクロ横ナギ 脚部縫合の刷毛 目	刷毛目整形		第5 号住
13回 11	甕	28.0	粘土 一 一	砂粒を含む 色調 内外茶褐色 焼成 良好	口縁部が水平にち かく外反する。	ロクロ横ナギ 脚部縫合の刷毛 目	刷毛目整形		第5 号住
13回 12	甕	28.0	粘土 一 一	砂粒を含む 色調 内外茶褐色 焼成 良好	ロクロ横ナギ 脚部縫合の刷毛 目	刷毛目整形			第5 号住
14回 1	甕	14.5 5.5 6.0	粘土 一 一	粗い 色調 内赤 外茶褐色 焼成 良好	ロクロ横ナギ	黑色研磨	回転条切り		第6 号住
14回 2	甕	13.0	粘土 一 一	精々される 色調 赤褐色 焼成 良好	ロクロ横ナギ	ロクロ横ナギ			第6 号住
14回 3	环	12.0	粘土 一 一	粗い 色調 内赤 外茶褐色 焼成 良好	ロクロ横ナギ	黑色研磨			第6 号住
14回 4	环	— 6.0	粘土 一 一	精々される 色調 赤褐色 焼成 良好	ロクロ横ナギ	黑色研磨	回転条切り		第6 号住
14回 5	环	12.0 3.5 —	粘土 一 一	粗い 色調 灰褐色 焼成 良好	ロクロ横ナギ	ロクロ横ナギ	回転条切り		第6 号住
14回 6	环	12.0 5.0 —	粘土 一 一	粗い 色調 灰褐色 焼成 良好	ロクロ横ナギ	ロクロ横ナギ			第6 号住
14回 7	上 器 底	14.0 2.0 6.0	粘土 一 一	粘々 色調 赤褐色 焼成 良好	ロクロ横ナギ	ロクロ横ナギ	回転ヘラ削り		第6 号住
14回 8	环	13.0	粘土 一 一	粘々 色調 赤褐色 焼成 良好	ロクロ横ナギ	ロクロ横ナギ			第6 号住
14回 9	土師 器皿	14.0 3.0 6.0	粘土 一 一	精々される 色調 赤褐色 焼成 良好	ロクロ横ナギ	ロクロ横ナギ	回転ヘラ削り		第6 号住
14回 10	上 器 底	13.0	粘土 一 一	やや粗い 色調 赤褐色 焼成 良好	ロクロ横ナギ	ロクロ横ナギ			第6 号住

図表 IV (出土遺物表)

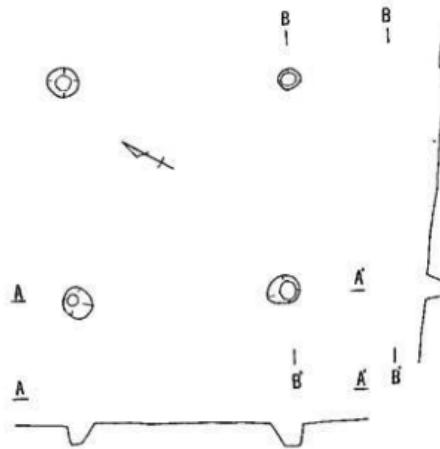
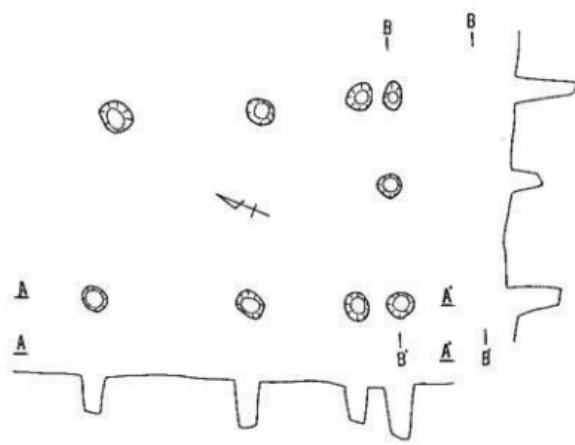
件名 番号	法 器形 cm(或等)	土器の説明	器形の特徴	調 査			造構	備 考
				外 面	内 面	底		
15回 11 器環	23.5 —	胎土 砂粒を含む 色調 焼成 良好	口縁部に比べて脚 部が薄くなる	口縁部の刷毛目 脚部綫維の刷毛 目	横位の刷毛目		第6 号住	
15回 12 器環	26.0 —	胎土 粗い 色調 焼成 良好	口縁部が粗曲し、 脚部が厚さで外反	脚部綫維の刷毛 目	横位の刷毛目		第6 号住	
15回 13 器環	26.0 —	胎土 砂粒を含む 色調 焼成 良好	口縁部は脚部と同 じ厚さで外反	脚部綫維の刷毛 目	横位の刷毛目		第6 号住	
15回 14 器環	24.0 —	胎土 粗い 色調 焼成 良好	口縁部は脚部と同 じ厚さで外反	脚部綫維の刷毛 目	横位の刷毛目		第6 号住	
16回 1 落合 古村 屋	13.0 3.0 6.6	胎土 黄 色調 内墨 外茶褐色 焼成 良好	口縁部は玉縁	ロクロ横ナデ	黑色研磨	回転糸切り	第7 号住	
16回 2 器組	13.0 3.0 5.0	胎土 やや不良 色調 黄褐色 焼成 よくない	口縁部は玉縁	脚部下半ヘラ削 り	ロクロ横ナデ	回転糸切り後全 面ヘラ削り	第7 号住	
16回 3 器環	— 6.0	胎土 色調 内墨 外茶褐色 焼成 不良		ロクロ横ナデ	黑色研磨	回転糸切り	第7 号住	
16回 4 灰陶 陶器	— 6.0	胎土 色調 赤褐色 焼成 良好					第8 釉は つけか け	
16回 5 环	12.0 4.0 6.0	胎土 色調 内墨 外茶褐色 焼成 良好	口縁部は玉縁	ロクロ横ナデ	黑色研磨	回転糸切り	第9 号住	
16回 6 环	— 4.5	胎土 色調 赤褐色 焼成 良好		脚部下半斜位の ヘラ削り	ロクロ横ナデ	回転糸切り後全 面ヘラ削り	第9 号住	
16回 7 灰陶 陶器 环	13.0 3.5 6.0	胎土 色調 赤褐色 焼成 良好	口縁部は玉縁を呈 する。	釉全面	釉全面	高台釉無	第9 O-53 号住 空式期	
16回 8 灰陶 陶器 环	15.5 3.0 7.0	胎土 色調 赤褐色 焼成 良好	口縁部は玉縁	釉 黑	釉全面	高台釉無	第9 O-53 号住 空式期	
16回 9 器環	15.0 — —	胎土 色調 内墨 外茶褐色 焼成 良好	口縁部は玉縁	ロクロ横ナデ	黑色研磨		第10 号住	
16回 10 器環	14.0 — —	胎土 色調 内墨 外茶褐色 焼成 良好	口縁部は玉縁	ロクロ横ナデ	黑色研磨		第10 号住	
16回 11 器環	— 7.0	胎土 色調 赤褐色 焼成 良好		釉 黑	釉全面	高台釉無	第10 号住	
何回 12 器環	14.0 —	胎土 色調 赤褐色 焼成 良好	口縁部は玉縁	ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ		第11 号住	
何回 13 器環	16.0 —	胎土 色調 赤褐色 焼成 良好	口縁部は玉縁	ロクロ横ナデ	黑色研磨		第11 号住	
何回 14 器環	— 4.0	胎土 色調 赤褐色 焼成 良好		脚部下半斜位の ヘラ削り	ロクロ横ナデ		第11 号住	
何回 15 器環	— 5.5	胎土 色調 赤褐色 焼成 良好		脚部下半斜位の ヘラ削り	輪文あり	回転糸切り後全 面ヘラ削り	第11 号住	

図表 V

捕獲番号	頭形 法 cm	内面 器官 底質	口器の種類	表面の特徴	調査結果			遺傳	備考
					外面	内面	底		
17回 1	土師 器皿	38.0 — —	胎七 色調 焼成	こまかい 茶褐色 良好	口縁部は肥厚 いちごるしく直線 的に外反する	脣部縦位の刷毛 目	横位の刷毛目	第9 号住	
17回 2	土師 器皿	28.0 — —	胎七 色調 焼成	ややあらい 茶褐色 良好	口縁部は肥厚化し 内に輪をもつ。	脣部縦位の刷毛 目	横位の刷毛目	第9 号住	
17回 3	土師 器皿	28.5 — —	胎七 色調 焼成	赤 茶褐色 良好	口縁部が肥厚化し 外反する	脣部縦位の刷毛 目	横位の刷毛目	第9 号住	
17回 4	土師 器皿	25.0 — —	胎七 色調 焼成	あらい 茶褐色 良好	口縁部がくの字を 呈する	脣部縦位の刷毛 目	横位の刷毛目	第9 号住	
17回 5	土師 器皿	24.0 — —	胎七 色調 焼成	あらい 茶褐色 良好	口縁部が直線をも って外反する。	脣部縦位の刷毛 目	横位の刷毛目	第9 号住	
17回 6	土師 器皿	16.5 — —	胎七 色調 焼成	ややあらい 茶褐色 良好	口縁部が脣部と同 じように厚くなる。	脣部縦位の刷毛 目	横位の刷毛目	第9 号住	
17回 7	土師 器皿	15.5 — —	胎七 色調 焼成	あらい 茶褐色 良好	口縁部に比べて脣 部はうすい。	脣部縦位の刷毛 目	横位の刷毛目	第9 号住	
18回 1	土師 器皿	26.5 — —	胎七 色調 焼成	ややあらい 茶褐色 良好	口縁部内部でくび れをもつ	脣部縦位の刷毛 目	横位の刷毛目	第11 号住	
18回 2	土師 器皿	27.5 — —	胎七 色調 焼成	あらい 茶褐色 良好	口縁部内部でくび れをもつ。	脣部縦位の刷毛 目	横位の刷毛目	第11 号住	
18回 3	土師 器皿	27.0 — —	胎七 色調 焼成	こまかい 茶褐色 良好	口縁部が肥厚化、 特に外側が肥厚化 する。	脣部縦位の刷毛 目	横位の刷毛目	第11 号住	
18回 4	土師 器皿	25.5 — —	胎七 色調 焼成	あらい 茶褐色 良好	口縁部と脣部の厚 さが同じ。	脣部縦位の刷毛 目	横位の刷毛目	第11 号住	
18回 5	土師 器皿	23.5 — —	胎七 色調 焼成	こまかい 茶褐色 良好	口縁部と脣部の厚 さが同じ。	脣部縦位の刷毛 目	横位の刷毛目	第11 号住	
18回 6	土師 器皿	— 9.0	胎七 色調 焼成	砂粒を含む 茶褐色 良好		脣部縦位の刷毛 目	横位の刷毛目	第11 底部は 号住 木本底	
18回 7	土師 器皿	— 10.0	胎七 色調 焼成	砂粒を含む 茶褐色 良好		脣部縦位の刷毛 目	横位の刷毛目	第11 底部は 号住 木葉底	
19回 1	土師 器皿	27.0 — —	胎七 色調 焼成	茶褐色 良好	口縁部はゆるやか に外反する。	口縁部は縦位の 刷毛目、脣部は横位 の刷毛目		第12 号住	
19回 2	土師 器皿	27.0 — —	胎七 色調 焼成	内茶褐色 外茶褐色	口縁部内に浅いく びれをもつ。	口縁横位の刷毛 目、脣部は縦位 の刷毛目		第12 号住	
19回 3	土師 器皿	25.0 — —	胎七 色調 焼成	茶褐色 良好	口縁部が肥厚化す る。	口縁横位の刷毛 目、脣部は縦位 の刷毛目		第12 号住	
19回 4	土師 器皿	25.5 — —	胎七 色調 焼成	茶褐色 良好	口縁と脣部が同じ くらいの厚さであ る。	口縁横位の刷毛 目、脣部は縦位 の刷毛目		第12 号住	
19回 5	土師 器皿	20.0 — —	胎七 色調 焼成	茶褐色 良好	口縁部内面に浅い 網織	ロクロ横ナギ	ロクロ横ナギ	第12 号住	

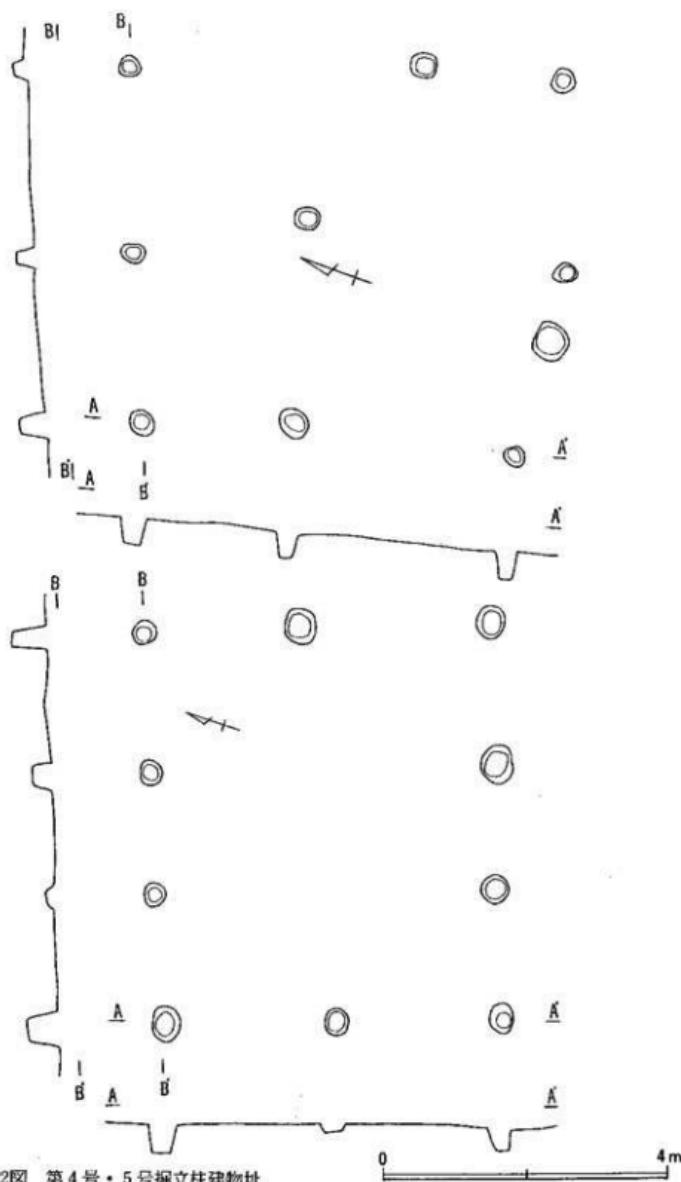


第20図 第1号柱立柱建物址



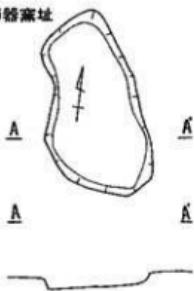
0 4 m

第21図 第2号・3号掘立柱建物址



第22図 第4号・5号据立柱建物址

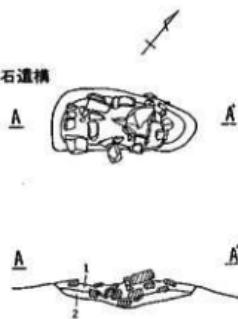
第1号土師器窯址



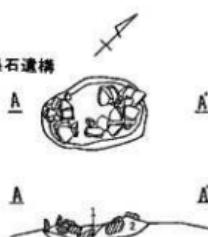
第2号土師器窯址



第1号集石遺構



第2号集石遺構



1. 黒褐色土(ロームを含む)
2. 黒褐色土(ロームを多く含む)

第12号土壤

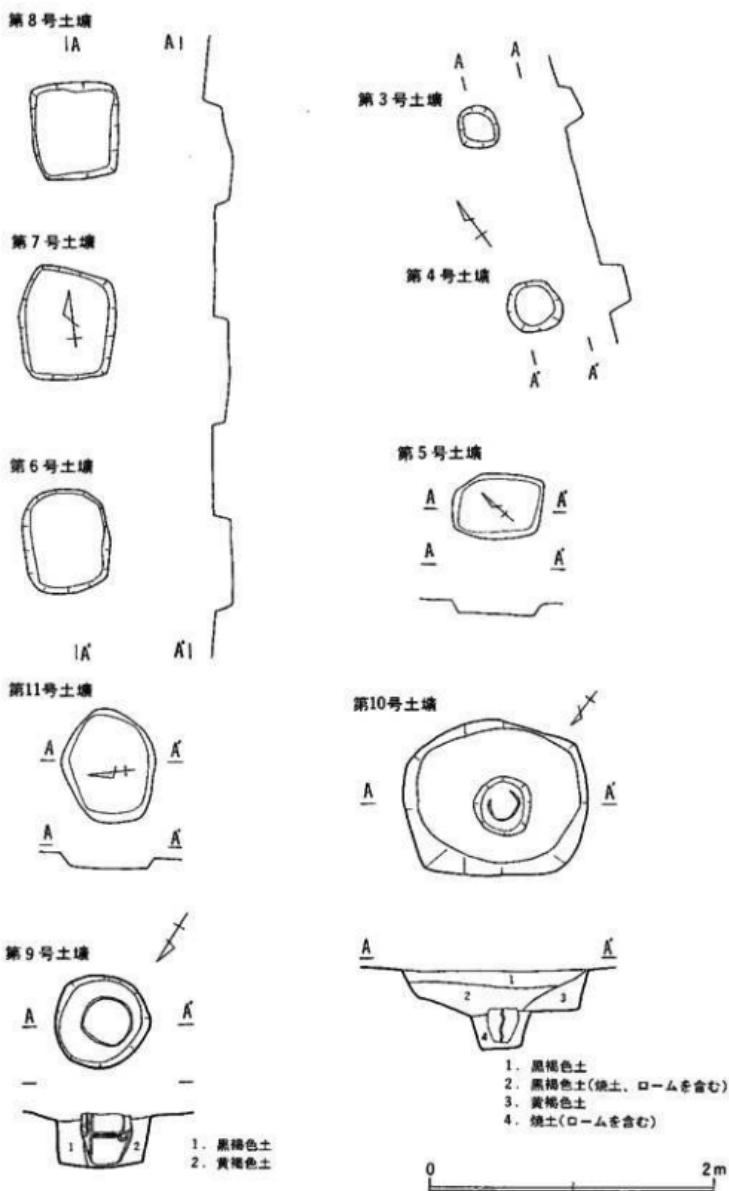


0

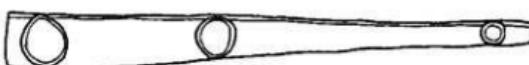
2m

1. 黒褐色土(ローム粒を含む)
2. 黒褐色土(焼土、炭化物を含む)
3. 黄褐色土(焼土を含む)

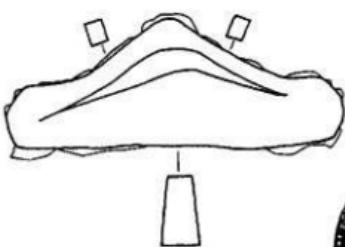
第23図 第1号・2号土師器窯址、第1号・2号集石遺構、第12土壤



第24図 第3号・4号・5号・6号・7号・8号・9号・10号・11号土壤



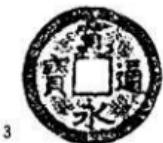
1



2



5



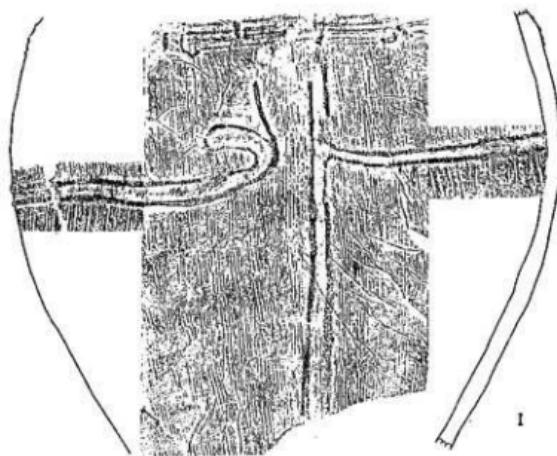
3



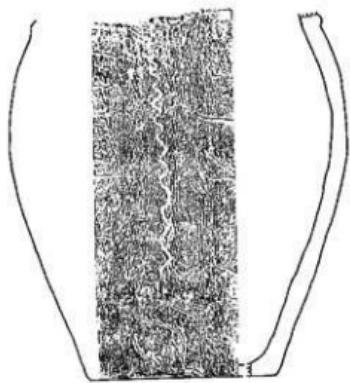
4



第25図 第6号土壤・第7号土壤・第8号土壤遺構外出土遺物



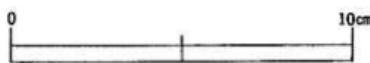
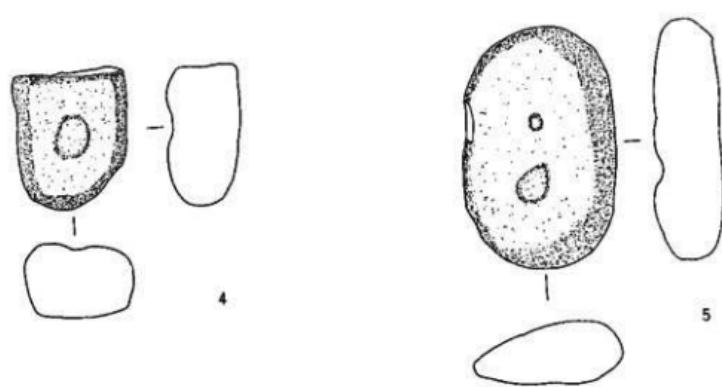
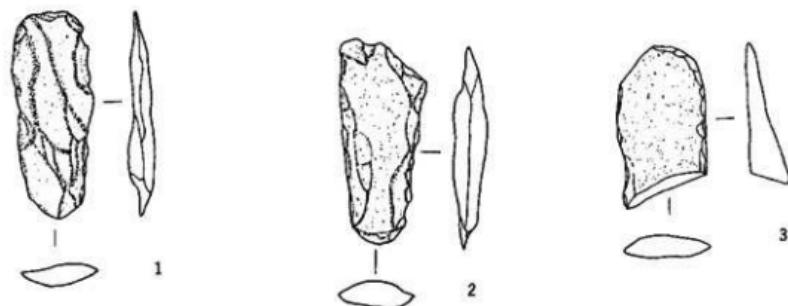
1



2



第26図 第9号土塚(2)・第10号土塚(1)出土遺物



第27図 第11号土壤(1)・第12号土壤(2・3)、第1号集石遺構出土遺物(4・5)

IV. ま　と　め

前田遺構において検出された遺構・遺物の詳細は前述の如くである。検出された遺構は、堅穴住居址 9軒、掘立柱建物址 4軒、土師器窯址 2基、集石造構 2基、土壙 10基で時期は堅穴住居址、掘立柱建物址、土師器窯址は平安時代の所産であった。一方、出土遺物は、土師器、須恵器、灰釉陶器、石製品、繩文式土器などがあるが、遺構に伴出する遺物は土師器が主体を占めた。以下、平安時代の遺構・遺物を中心として、若干の検討をし、まとめとしたい。

遺構

堅穴住居址について

前田遺跡で検出した住居址は 9 軒で、完掘できた住居址は 7 軒である。住居址形態には、方形、長方形があり、形態規模は、長辺 4 メートル、短辺 3 メートル前後を基本的な住居址としている。各コーナーは全体に丸味をもち、全体的には整然とした形態のものが多い。カマドの位置は、カマドの残存した住居址が東壁部に設置される規則性がみられ、中央部より南側に片寄る傾向が指摘でき、第 2 号、第 10 号住居址では、東南コーナー部に接するほどである。柱穴と認められるピットは、存在しない第 5 号、第 7 号、第 9 号、第 10 号住居址があり、存在しても、規則的な位置関係が無く、主支柱穴の区別も明瞭ではない。柱穴が存在しない住居址のなかで、暖側近くの床に、平石がいくつかおかれ、礎石的な役割をはたしていたとも考えられ、上層構造の機能的役割が問題となる。壁溝は、検出された全住居址で確認された。カマドの構造は、大半の住居址に関して、燃焼部で焼土が少ない。袖は平石を何枚か立てて、それを被うようにし、白色粘土、ロームを補強材として用いている。掘り方の平面形態は規則性はないが、燃焼部は屋内にもち、楕円形のもので、煙道部は、燃焼部より急傾斜をもって壁外へ立ち上がっている。以上形態及び内部施設について見てきたが、前田遺跡の住居址はめだった変化はみとめられないが、共通して見られる現象は、住居址に占めるカマドの構築位置が必ず同じ位置にあることであり、住居址の構築に対する集落の規制、あるいは、戸の規制等があつたかもしれない。なお、2号住居址、6号住居址については、鉄滓などの遺物だけではなく、炉と思われるピットのあり方や台石の存在等、たんなる住居址というより、小鎌治的遺構と考えられる。

掘立柱建物址について

本遺跡で確認された掘立柱建物址は、全部で 5 軒確認された。これらの掘立柱建物址は、3間 × 6 間（1軒）、1間 × 1間（1軒）、2間 × 3 間（2軒）、2間 × 2 間（1軒）で、5 軒のうち、4 軒は、南北方向に長軸を有する掘立柱建物址である。1軒が東西方向に長軸を有する建物址である。1号掘立柱建物址は東西に扉をもつ住居址である。2号掘立柱建物址と 3 号掘立柱建物址はその規模、構造から、倉庫と考えられる。4号掘立柱建物址は東柱がなく、住居址と考えられ、5号掘立柱建物址は東柱を有し、小規模な總柱式の倉庫址である。

土師器窯址について

本遺跡から検出された土師器の窯址は、2基検出され、その平面形態は橢円形を呈し、内部の覆土は、焼上層、炭化物層、灰層が堆積している。壁・底は極度の加熱により赤化していた。出土遺物は少量であるが、二次的な焼成をうせた遺物もみうけられた。

遺 物

出土土器について

山梨県内の奈良・平安の歴史時代（特に平安時代）を中心とした土師器の編年研究は、北巨摩郡を中心に末木健氏、東八代郡を中心にして坂本美夫氏、又富士山麓を中心に堀内真氏が、そして都留市の駒之内原遺跡を主体にした奈良泰史氏によっておこなわれ、いくたの成果をあげている。昭和58年に至り、末木健、坂本美夫、堀内真の三氏により、神奈川考古同人会の主催する「奈良、平安時代土器の諸問題」と題するシンポジウムで、甲斐型土器を中心とした奈良、平安時代の土師器編年の大綱が呈示された。

ここでは以上の研究成果を基にして本遺跡の出土土器について、その編年的位置について考えたい。（特に本遺跡が北巨摩郡に所在することにより、末木健氏の北巨摩郡地方の土師器編年に依拠するところが大きい。）尚、昭和57年におこなった発掘調査において出土した土器も使用することにし、前田遺跡出土の土器を観察し、便宜的にⅠ～Ⅳ期を設定した。

第Ⅰ期（第4号住居址より出土した土器が相当する。）

第4号住居址からは内面内黒のいわゆる信州系の土器は出土していない。土師器は口唇部が内湾し、底径が大きい、体部下半に横ないし、斜位のヘラケズリをおこなう。内面には放射状ないし鋸歯状の暗文が施される。色調は内外面共に赤褐色を呈する。本環はいわゆる「甲斐型土器」といわれる土器である。末木健氏編年の第Ⅱ期に相当する。

第Ⅱ期（第2号、6号住居址の2軒が相当する。）

土師器は口唇部形態が丸形から干縁への時期にあたる。整形等で、器体部下半に斜位のヘラケズリがみられ、内面に鋸歯状の暗文がこの時期まで残る。土師器は、内面に暗文がなく、器体部下半に斜位のヘラケズリを施し、底部を回転糸切後ヘラケズリをおこなっている环もみられる。又外面赤褐色であるが、内面が黒色の甲斐型环が併存し、この時期に、信州系の内面内黒の环が併出する。皿は盤状で、大きな底部と内面に一段くびれをもつ。蓋は口縁部が肥厚化し、外表面は横方向、内面は横方向にハケ目整形が施される。又小さな縫もみられる。

末木健氏編年の第Ⅲ期に相当する。

第Ⅲ期（第3号、5号、7号住居址の3軒が相当する。）

土師器壺は口縁部が飞縁化となり、肥厚する。器体部下半は斜位のヘラケズリされ、底部は回転糸切り後全面のヘラケズリが施される。この時期より内面に暗文がみられなくなる。皿は口縁部が飞縁化し、くびれがめだたなくなる。甕は一段と口縁部が肥厚化し、くの字状を呈す。末木健氏編年の第IV期にあたる。

第IV期（第8号、9号、10号、11号住居址の4軒に相当する。）

土師器壺の口縁部は完全に玉縁化する。信州系の内面内黒の壺の口縁部も玉縁化していく。本時期より灰釉陶器が併出する。甕は口縁部が非常に肥厚する。末木健氏編年の第V期に相当する。

以上、本遺跡の第I期～第IV期の土器群の様相を述べたが、次に各時期の年代観は、末木健氏の編年によると。

第I期（末木健氏編年のII期）は9世紀末～10世紀初め。

第II期（末木健氏編年のIII期）は10世紀前半。

第III期（末木健氏編年のIV期）は10世紀中頃。

第IV期（末木健氏編年のV期）は10世紀後～11世紀前半である。

参考文献

末木 健 1974『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告』一北巨摩郡小瀬沢町地内
—山梨県教育委員会

末木 健 1976『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告』一北巨摩郡須玉町地内—
山梨県教育委員会

末木 健、坂本美夫、堀内 真 1983「シンボジウム、奈良、平安時代土器の諸問題、甲斐地域」神奈川考古第14号 神奈川考古同人会

小瀬沢町教育委員会 1978『小瀬沢町の原始古代遺跡』

小瀬沢町教育委員会 1983『前田遺跡発掘調査報告書』

土器類(下) 直 濱底器(下) 灰輪(环、环)		土器類、灰輪(裏、外)	土器類(上) 濱底器(下) 灰輪(环)	土 器 (裏)
上期(六合生田四井)	24 23 22	25 26 27		
中期(十二井前出一井)	67 66 68 69	70 71	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20	
四期(上平井前出二井)	14 13 12 11 15		14 13 12 11 15 16 17 18 19 20	
IV 期(大豆前田三井)	115 116 104 105 106 114 117	118 119 120 121 122	11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22	
V 期(上平井田三井)	107 108 109 110 111 112 113			

第28図 北几摩地方平安時代土器類編年表(末木健氏原図に付図)

前出遺跡編年図

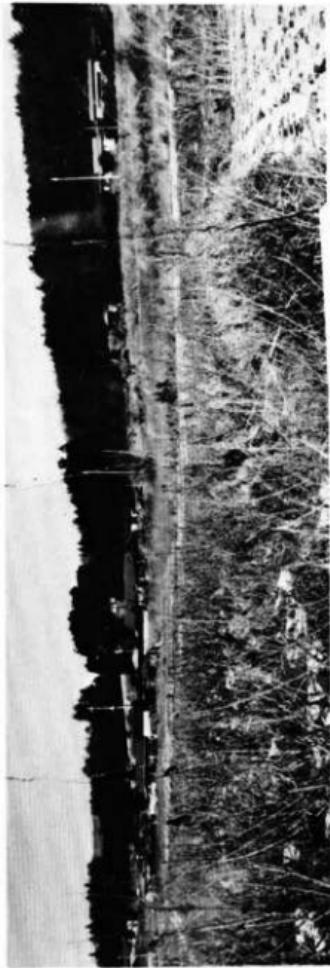
おわりに

今回の調査では、以上のような多大な成果を得ることができました。本報告書が北巨摩地域の平安時代研究の解明の一助になれば幸いである。

文末ではありますが、調査に参加され、又協力していただいた地元下笠尾の方々をはじめ、発掘調査、整理又報告書を刊行するにあたり適切な助言をいただいた、県文化課、山梨県埋文センター、綾北土地改良事務所、小淵沢町土地改良区に対し、厚く感謝する次第であります。

図版

図版 1



遺跡近影（斜上り）



遺跡近影（遺構確認作業）



第2号住居址

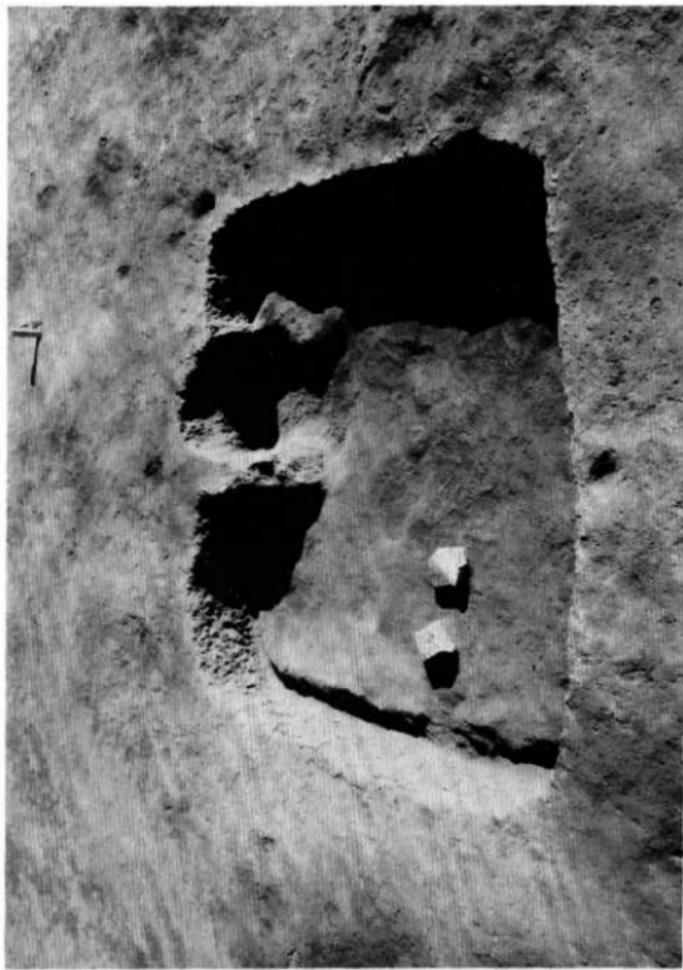


第5号住居址

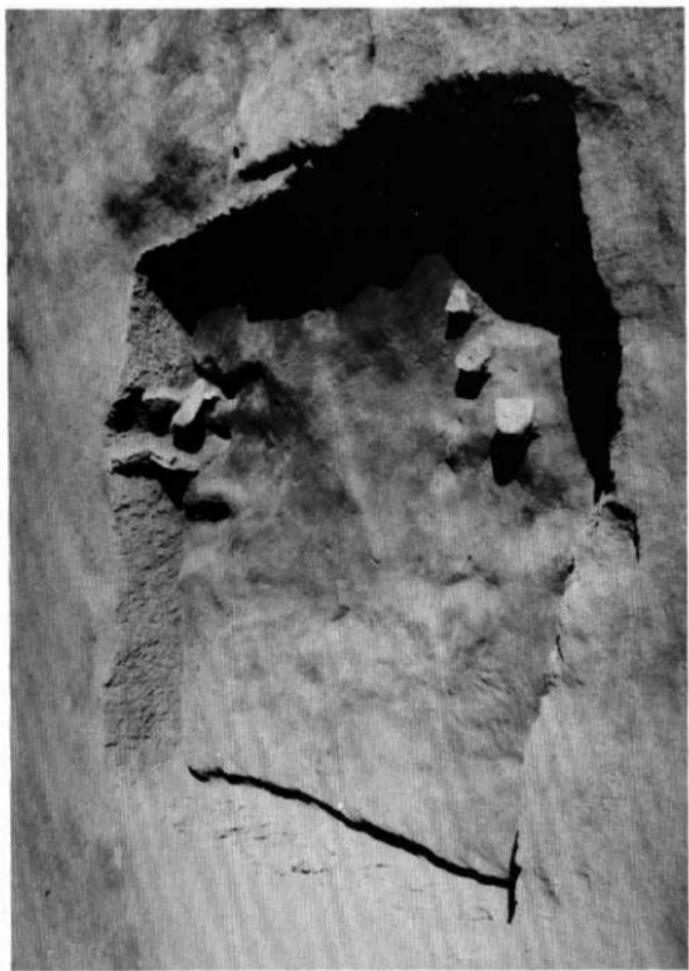
圖 版 4



第 6 号住居址

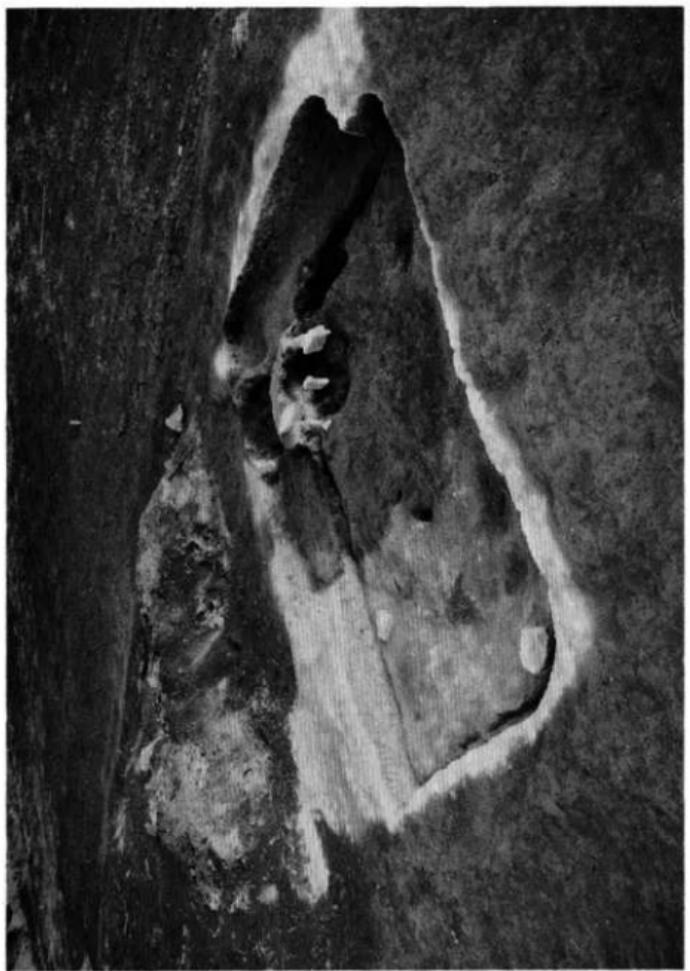


第7号住居址

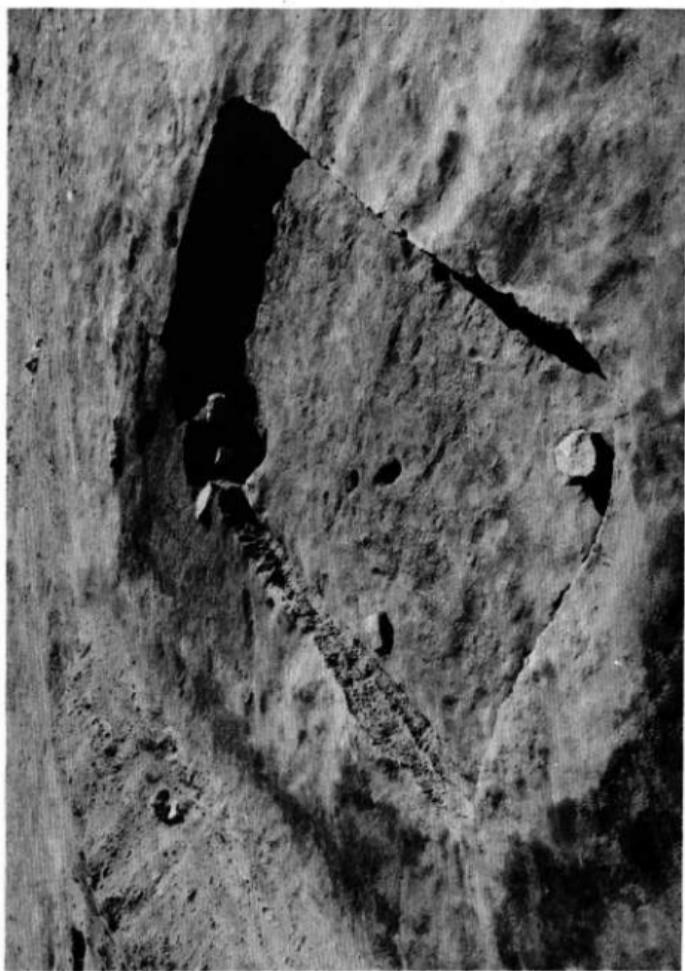


第8·9号住居址

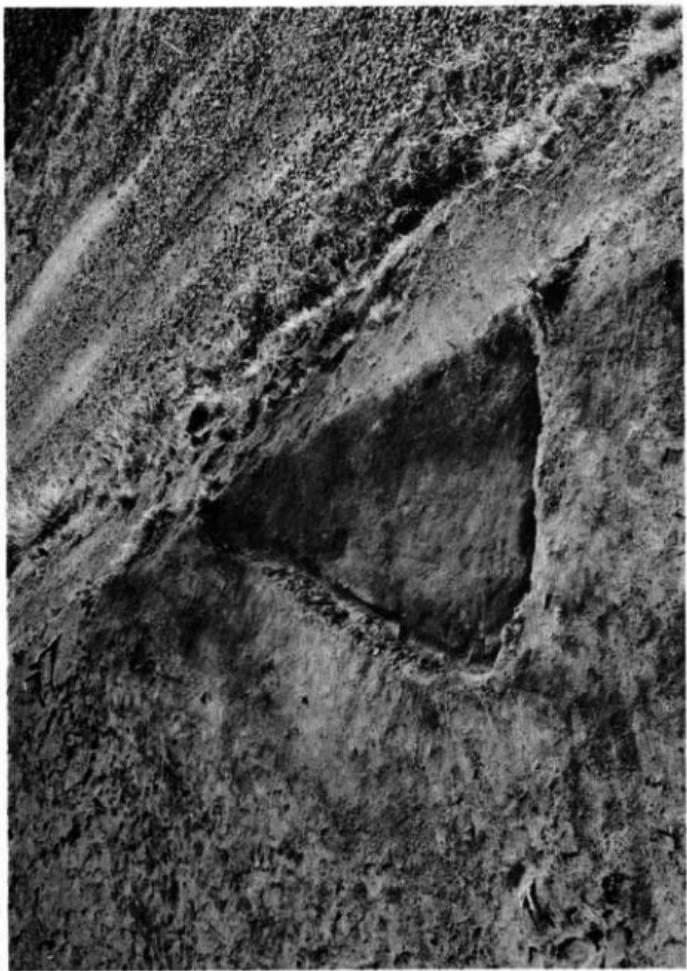




第10・11号住居址



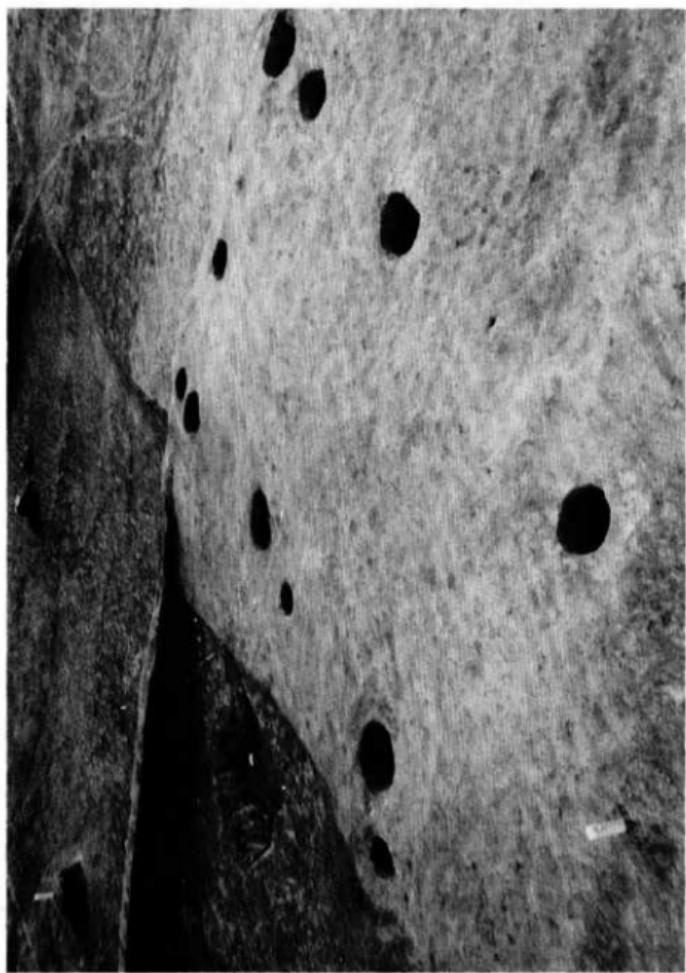
第10号住居址



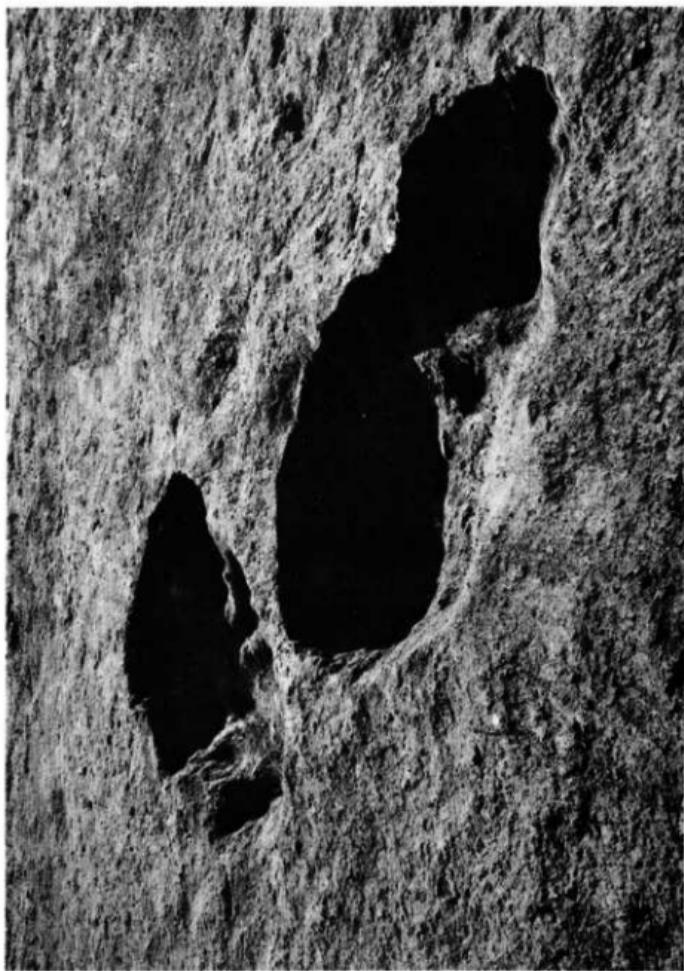
第12号住居址



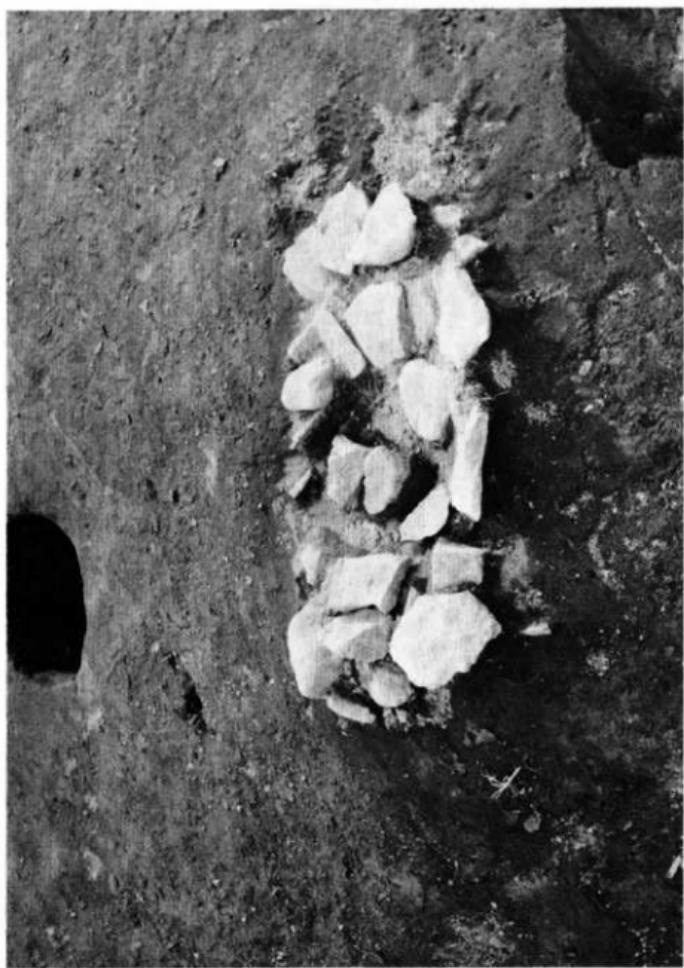
第1号搬立住建物址



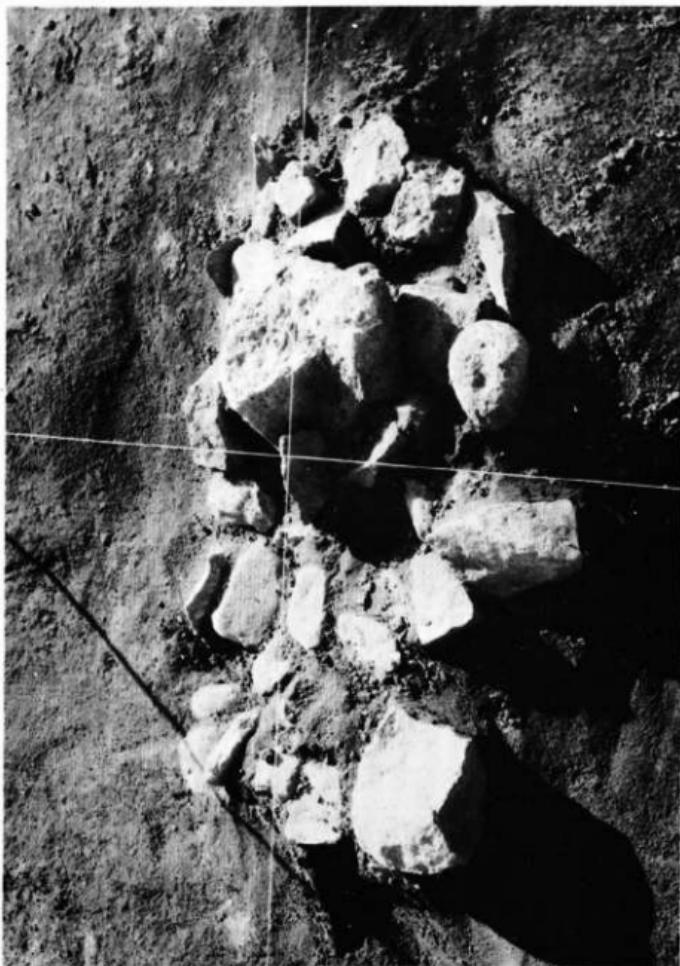
第2号据立柱建物址



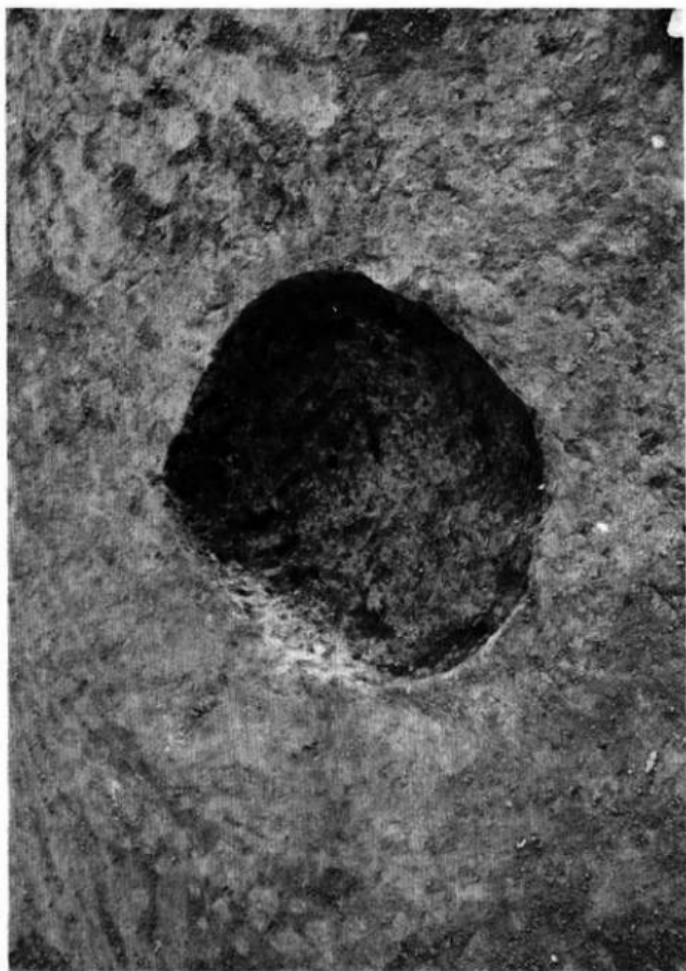
第1号・第2号土衛器発見



第1号集石遺構



第2号集石遺構



第6号土壤



第7号土壤



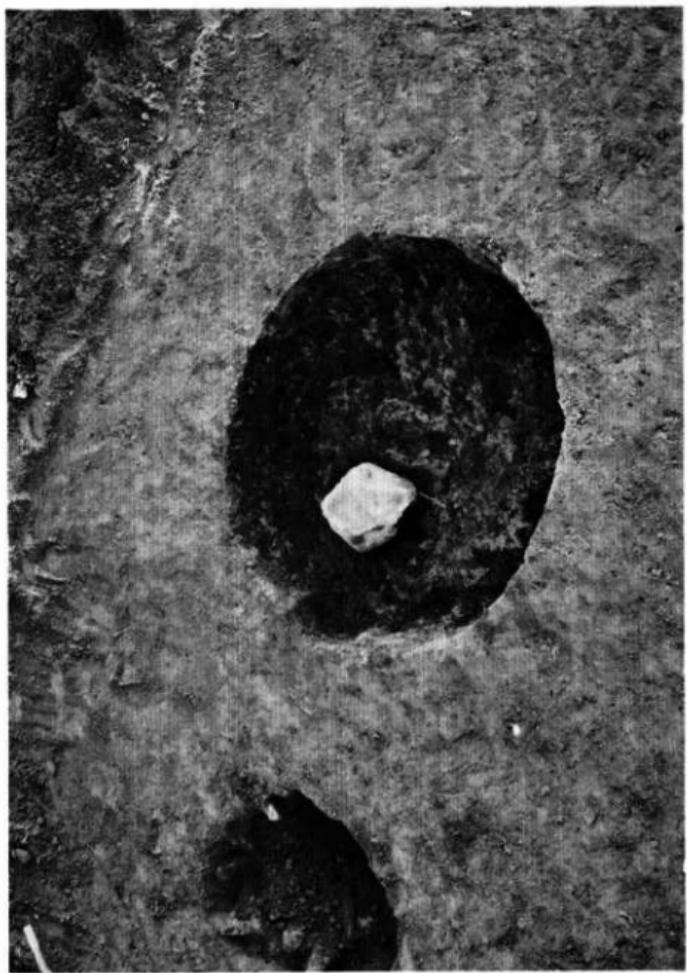
第 8 号土壤



第9号土壤



第10号土壙



第11号土壤



第12号土壤



第2号住居址
出土遺物



第2号住居址
出土遺物（鉄滓）



調査参加者



第2号住居址出土遺物(1)



第2号住居址出土遺物(2)



第5号住居址出土遺物



第6号住居址出土遗物



1



2



3



4



5

第7号住居址出土遺物(1~4)・第8号住居址出土遺物(5)

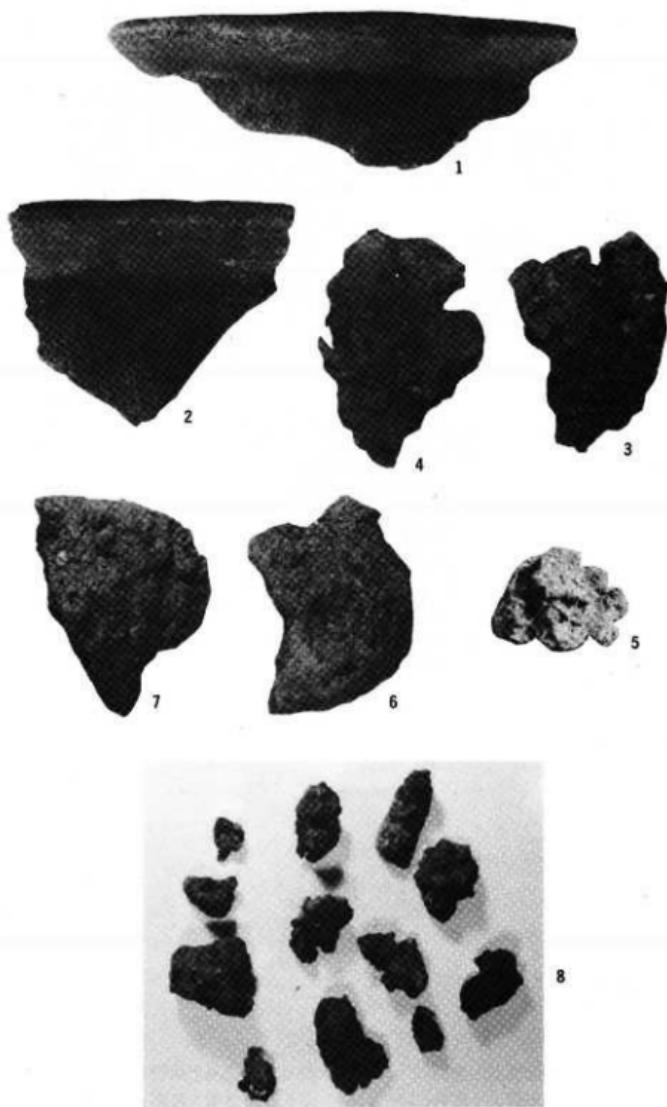
圖版
29



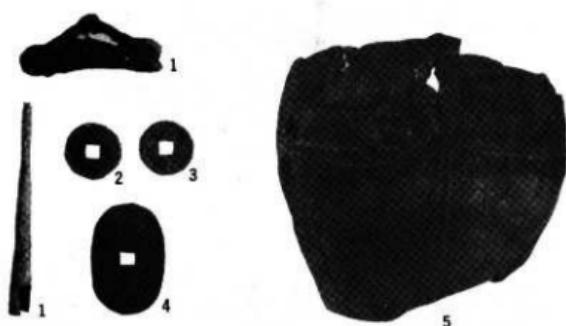
第9号住居址出土遺物(1~8)・第10号住居址出土遺物(9)



第11号住居址出土遺物



第12号住居址出土遺物(1～2)・第2号住居址鐵滓(3・4・8)
・第6号住居址出土遺物(5～7)



第6号土壤出土遗物(1·4)

第7号土壤出土遗物(3)

第8号土壤出土遗物(6)

第9号土壤出土遗物(6)

第10号土壤出土遗物(5)

第1号土师器窑址(7)出土遗物

前田遺跡

——発行日——

昭和 60 年 3 月 31 日

——発行——

小瀬沢町教育委員会
山梨県北巨摩郡小瀬沢町7711

——印 刷——

駿北印刷株式会社
